清心

No.4

清　心　四号　目　次

表紙デザイン　二六五七番
表紙題字　二六一〇番

明けましておめでとう	毛利晴一
詩五編	静岡県　2,743番 徳島県　2,683番
良き父親であり度いと願う 宗教について私は思う	毛利生
まだ見ぬ奥様に	毛利生
波紋	SY生
幼きトロツキスト	大阪市　一会員
愛の半生記（前編）	富山県　富岡生
わな	大阪市　MH生
虐殺	東京都　2,720番
正しい常識と 円満で平和的な人間にな って欲しい	毛利生
連載小説　心の波止場	東京都　佐藤正
連載　生いたち（三）	横浜市　青山生
雑件（お願いや注意）	事務局
会員たより	事務局

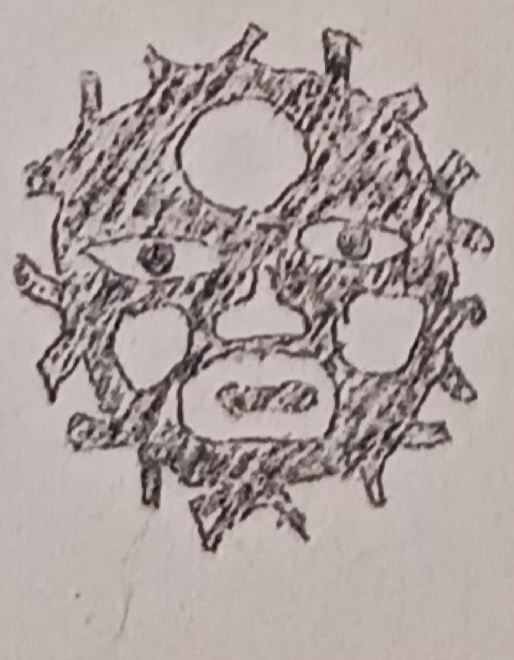
明けましておめでとう

毛　利　晴　一

徐夜の鐘を聞き終ってからしばらくして私は小林少年をつれて近くの住吉神社に初詣でしました。隣りで小林少年は何を祈願したか私は知りませんが私は先づ最初に会員の皆様の幸運であります様にとそして今年も又一段と本会の盛会であります様にと祈りました。この住吉神社は有名な神社ですからその頃にはもうどんどんと次から次からえと参拝者で埋まりました。そして各放送局がその模様をカメラにおさめていました。私は幸い近くに住んでいますのでこゝまで五分位で、参拝出来ます。それから帰宅してぐっすりと寝込みました。起きた時は稀れに見る晴天で暖いお正月でした。一日は次から次へと十数人の来客があって可成り忙しい一日でした。でもこうして大変元気でお正月を迎えられた事はほんとうに幸福だとしみじみ思っております。

私は現在ほんとうに頭の中には会と会員さんの事しか外には何もありません。これだけ一つの事に没頭出来ることも考え方に依ると幸せだと私は思っております。こうして私の様な人間が老体に鞭打って本年も又一生県命に本会を守っていく決心です。会員の皆様には何かと目だるい点もあることゝ存じますがどしどし御注意や鞭達下さいますして昨年以上に御協力下さいます様に切にお願い申上げます。特に今年は当地に於て万国博が開催されますので多くの方々が来訪下さるものと楽しみにしてお待ち致しております。

尚、早々に賀状をたくさん戴きましたが当方より御礼も挨拶も申上げませず、大変に失礼致しましたことを玆に謹んで御詫び旁々御礼を申上げます。



旅立ったひと

徳島県　二六八三生

美しかったあのひと
やさしかったあのとも、
しかし、あのひともあのともも、
みんな　遠くへ
旅だってしまった。
—

北風の吹きすさぶ
町から町へ
さすらいびとのように
あのひとあのとものような
おもかげを求めて
あてもなく
ぼくは、今日もさまよう

いつの日か　どこかで
ふとめぐりあい
こののぞみが満たされるなら、
ぼくの涙はかわき
ぼくの身のめぐりすべては、
このうえもなく美しい
金色の光りと
かえられることだろう

求友広告を値下しました。
もっと広く大勢の人達に利用して頂く為に「求友」の広告を今迄一回千円だったから今後共どしどし利用して下さい。字数二百字まで、原稿同封現金を添えて申込んで下さい。

片思い

福岡県　二七四三番

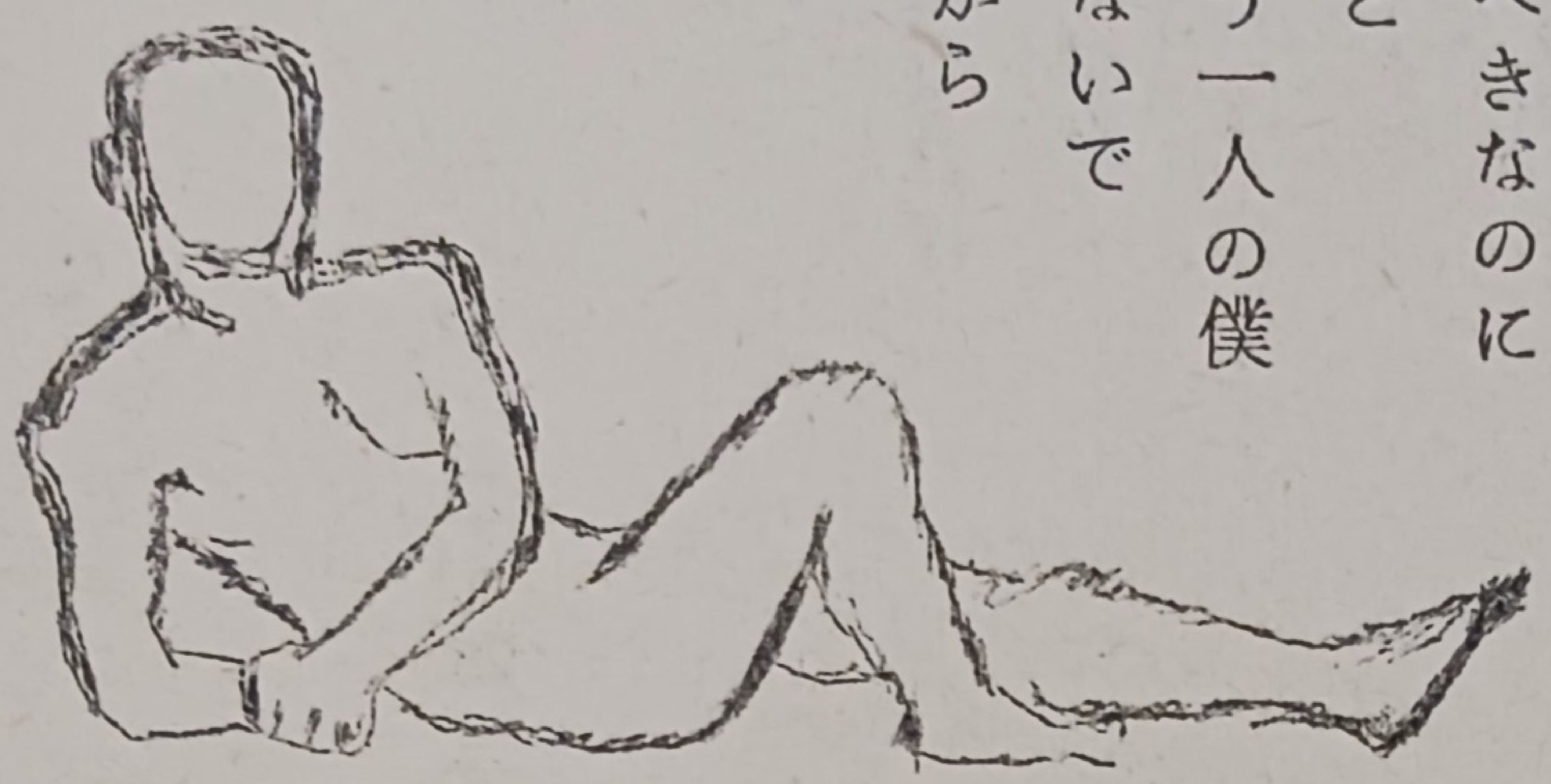
何時もつれなくして
僕を恐しませる君
そんな君なんか嫌いになれば
さぞ快いだろうと思うけど
そう思うはしから
君の美しい顔が浮んできて
僕の心をせつなくさせる
もし苦しむ事も愛と言えるなら
僕はこの苦しみに耐えるだろう
だけど　君の心に僕がいない限り
僕の愛は虚しい愛
いくら求めても
僕のものにはならぬ君だから
心に別れを誓ってみたけれど
たったひと夜を耐えかねて
夜更けの寝床に涙す僕

浩

福岡県　二七四三番

黄色のトックリセータを
無造作に着込んで
君が道をとおる時
その一帯が華やいで見える
まだ坊ちゃん刈りのローテインだけど
クラスで一番大きく
女の子に騒がれる君だから
それがちょっぴり気になる僕
肉体は大人に近いそれだけど
何と言ってもまだ子供
「兄ちゃん」と窓辺に現われ
ちょこんと隠れる仕草がたまらなく愛しく
君の為なら
どんな苦労もいとわないと思うけど
少年期の君は気まゝで反抗的
時々僕の手の届かぬ処に行ってしまう
大人と子供の愛だから

それも仕方のない事だけど
たった一つだけ気になる事
それは君が何時も持っている女の子の写真
好きな女の子かと尋ねたら
何も答えずたゞ笑ってたっけ
君が僕から離れるなんて考えられないけど
少年から若者へと成長していく時
君の愛は僕から離れて
女の子に注がれていくのであろうか
君の正しい成長を祈るべきなのに
そうなって欲しくないと
ひたすら願い続けるもう一人の僕
こんな僕の気持も知らないで
今日も僕に手を振りながら
朝の道を元気に
学校へ駆けていく君



冬の浜辺

福岡県　二七四三番

あんなに眩しかった夏の陽を
海底深く沈め
冬の浜辺は
吹く潮風だけがやたらに冷たく
たてたトレンチコートの襟もとから
僕の心に吹きつける

陽に灼けた逞しい素肌の群れは
波がさらってしまったのか
海辺は人影もなく
砂に埋れた片目のサングラスが
楽しかった夏の日を偲んでいるだけ

何時かは僕の耳もとで
愛の言葉もささやかれたのに
振り返ってみても
冬の浜辺は誰れもいない
砂丘に一つ僕の足跡が
涙に濡れてつゞくだけ

あいつ

福岡県　二七四三番

「兄ちゃん」
ご気嫌な時は
何度もそう呼んで
僕を喜ばせてくれたあいつ

女の子の話しはよせと言ったら
わざと女の子の話しをして
僕を怒らせ面白がってたあいつ

プロレスごっこの時
わざと僕の急所をけり
屈み込んだ僕を
心配顔で覗きこんだあいつ

あれから一年
東京に行ったまゝ手紙もよこさないが
今頃どうしてるかなあいつ

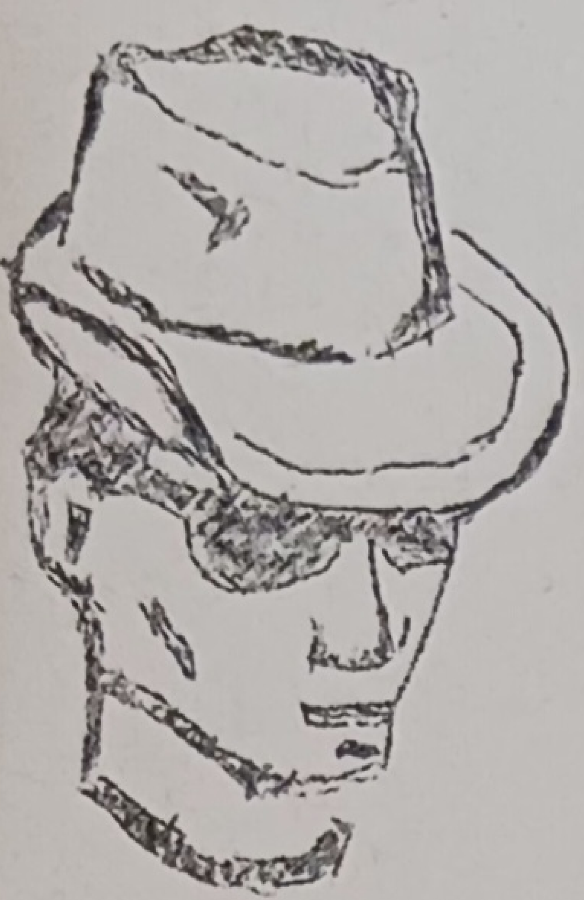
良き父親であり度いと願う

毛　利　生

私が本会を創立してから全国の同好者の多くの人と知り合って初めて発見した事であるがこの同好者の大体八〇パーセント位いの人が少年期に父をなくして全然父親の愛情を知らない人が又は父親はいることはいたが物凄く厳格な人でどうしても馴染なかったとか或いは父親が女極道がひどく何時も母親が泣いていた。そして自分はその母親の味方になって育って来たとか言う生い立ちの人が殆んどの様に思う様になりました。だから私は新しい入会者に大抵の場合参考までに父親との関係をよく尋ねることにしております。

こうしたかんきょうに育った者がどうして同性愛者になるのか？　そんなむづかしい事は私には判りませんが現実がそうであるから私は私なりに考えて同好者の性格の点について色々と普通の人より異っている部面はこれは幻時より父親の愛情とが父親よりの教育に欠けている点から来たものが相当の部面にあると言うことを感じて私は常に会員の皆様に父親のつもりになって愛情を持ち、

そして色々の話し合いに乗っております。こうすることに依って遅まき乍ら会員の皆さんが少しでもいゝ方向に伸びていたゞければ幸せだと思っております。気の弱い人には強く心の小さい人には大きくそして決断力のにぶい人には決断力を持ってもらう様に気をつかっている訳です。そしてこうして大勢の立派な社会人の父親となる為には常に飽くまでも正しく強くそれでいて円満でなければいけないと思って常に努力をしているのであります。父親が息子より巻揚げて勝手な浪費をしたり又は不公平であったり粗雑であったりしたのでは到底こんなうこがましい事は言えるものではありません。今日までもそして今後もこんな積りで努力して参りますから会員の皆様もその積りで私の言う事を聞いてそして苦言があれば遠慮なくどんどん申出でて下さる様にお願い致します。



宗教について私は思う

毛利生

私の家にいる高校三年生の小林君が昨年より霊友会を信仰して昨年も四泊五日の修行に参加しました。これは私がすゝめたのではなく友人にすゝめられて私に話したのです私もそれはよかろう。人間はどの宗教でも信仰していることはよいことで人間に落着きが出来るから大変結構なことだと賛成したのでした。

でも最近になって霊友会から君は少年部の幹事だとかなんとか言って来て盛んに集会集会と呼び出して来るのでこれは断らす様にしています。学業にあるものが自分が自身で信仰していることは大変良いことですがそれを放置して信仰にこつてしまうと却ってマイナスになると私は思うからです。つまり宗教を信仰することはいゝけれ共、宗教活動は今はしていてはいけないと言うことです。それよりも信仰にすることに依って正しい常識と円満で平和的な性格の人間になって常日頃の一挙一動に依って友人達を同化していくと言う身をもって実践すべきだと私は教えています。

むづかしいお説教を無理にして歩くよりも人から見て落着のある親切な立派な少年であることが余程いゝ事だと私は思うからであります。序いでだから申上げて置きますが私が霊友会の信者だから霊友会を信仰させたのではありません。私は仏教徒の家に生れましたので今でも東本願寺の信徒です。特別に信心しているかと言われるとそうではありません。

　私は宗教に対して自分なりにこんなふうに考えているのです。人は誰れでも衣服か汚れると洗濯します。身体が汚れるから風呂え這入ります。宗教は心の汚れを洗い落すのが宗教でつまり前者に言いかえれば衣服を洗う洗濯器は東芝でもナショナルでも三菱でも日立でもあるいは板の洗濯板でもいゝ訳です。どれかに信仰している人は常に心を洗っているから心の美しい人だと私は思っております。だから私はどの宗教でもいゝ信仰している人は好きです。安心してつきあいが出来ると思います。それをいやどの宗教やなければいけないなどゝ言って歩く人はそれは洗濯器のセールスと同じです。然も他社の製品を悪く言って歩くセールスなどはセールスでも余り立派なセールスではないと私は思っております。この私の考えでいくと私は無神論者ですとか宗教なんて否定しますなんて言う事は私は少しも心を洗っていない人間だと言っていることになりますから私には心の汚い人の様に思えます。私はいつでもどこででも神社の前を通れば頭を下げお寺の前を通れば拝み、時には天理教にも教会にでも参ります。そしてその都度自分の心を洗って清くしております。この考え方はどうでせうか間違っているでせうか。私はもうずっとこんな考え方をしております。だから私は特に態々京都の東本願寺まで参らなくても毎日毎日手近で信仰している訳です。

× × × × ×

(1) 追加名簿をみてどんどん申込みを

　最近入会者もどんどん増加しております。若い人も年輩の方もヤセた人も肥えた人も吃度あなたの好みの方もおられる筈です。

引込思案ばかりせずに当ってくだけろの主義でどんどん文通して下さい。中には壱千萬円の宝クジよりもっともっと幸せがあなたにころげ込んで来るかも判りません。

まえがき

会員の中には入会していることが奥様にバレてもめてしまって挙句の果てはその奥様より文句たらしい書面が来る。次はその返事の一例です。そこまで私は立ち入らねばならない。然し至誠通天とか申しますが私が誠意をこめて話しをすれば納得はしないまでもそんなものかなあゝと位い　に落着きを取戻し真剣に今後の事を考える様になるものです。

まだ見ぬ奥様に

毛　利　晴　一

兼ね兼ね貴家の御夫婦はオシドリ夫婦だとか、似合の御夫婦だと聞いておりました。そして唯、お二人の間が愛情のこまやか丈ではなく奥様も常に内助の効を発揮されて、お仕事の面でも実に御精励になり随って日々楽しい安定したお暮しをしておられる様子を承りかねがね敬服していた次第でございます。

ところが今回、奥様の目にふれたことは、実はこれは決して奥様の責任でも勿論なくさりとて御主人御自身の伊達や道楽でなられたことでもないつまりそのお二人のこまやかな愛情に不泡らず、御主人の心の中に小さな空洞が出来ていたのでございます。それを御主人がそっとお気付きになって、当会に入会されたのでございます。ところで当会のことでございますが既に御主人よりお聞き願ったことゝ存じますが当会は決して悪魔的な存在ではございません。つまり同病者がお互いに慰め励し合って、楽しく明るいしかも逞しい社会生活をする為に創立した会であります。

ですから本会の三千人近い会員の中で誰一人として貴家の幸福を破壊しようなどゝ考えている者は一人も御座いません。皆な助け合い励し合ってもっともっと幸せな生活をして頂き度いと願っている者ばかりでございます。

当会の会員の方々は皆さんが良識ある人の集りで社会的に立派な方も大勢おられます。

奥様には手紙の内容や又、会誌の内容を御覧になって実に馬鹿々々しいとお思いになると思いますが、そこが体質的に一寸異うところでありまして、それ等が一つのハケ口になっている訳であります。誠に勝手なことを申上げる様でございますが、これが若し他の病気と変って

いて、肺結核だとかガンであってもうあと幾ばくの寿命もないとか、又生きていても廃人同様な病気だったとしたらどうなるでせう。つまりこんな体質は御主人が生れ乍らにして背負って来られた宿命だと思います。
貴家の様な仲の良い一心同体の様なお二人の事ですからこゝまで申上げましたら、御賢名な奥様には御理解願えることゝ存じます。
この御主人の背負っておられる宿命を出来る丈け軽くして上げて下さい。そして尚更に仲良く仕事にお励み下さい。世間一般ではこんなことに余り理解がありませんので軽く変態性だと言っております。ですから斯る体質の人間は自分の体質を他人に知られることを極度に恐れております。又、奥様の場合でも決して自慢にはなりません。どうぞこの点について秘密を充分に守って上げて下さい。
更に重ねて申上げます。私共、会員一同はお二方の幸福こそ願っております。決してお宅に不幸を持ち込もうなどと誰一人として考えておりません。又御主人も奥様には充分に御存知の通り今更、道を誤る様なことをされる訳もございません。その点、呉れ々々も御安心下さい。そして一度お揃いで見物がてら来阪下さい。親しくお会い致しましてゆっくりと見物の御案内でも致しませう。

× × × × ×

こし折れ漫詠

○

朝寝好きの親の心を知らぬげに
伜ばかりは起上るなり

○

独り身の船頭なれや竿をにぎり
手早くかわを行きつもどりつ

○

セックスを洩らせし後の味気なき
そのむなしさは知る人と知る

御存じどど逸

○ 後悔

ゆんべしたので頭が痛い
せねばよかった木の枕

○ ホ・モ兄弟

弟破れがさせそでさせぬ
兄貴日傘で昼させる

(一二九九生)

短篇

波紋

S・Y生

伊織が城中から戻ってくると万之助が先刻から待っているときかされ、やはり来たのかと思うと、たのしい、しびれるような気持と一抹のわびしさを覚えた。これ迄、心をよせた少年のなかで彼ほど手ごわく、なかなか美しく凛々しい顔を自分の方へむけようとしなかった者はない。反抗気味に頬をこわばらせ自分の運命と今は観念したかの眼を閉ざて、夕方の冷たい空気のなかで着古された小倉袴の膝にじっと手を揃えて動こうともしない万之助に「灯を」と伊織は老女に燭台を持ってこさせた。

「決心はついたか」自分でも弾んでいるのが少しわかる声を出して彼は自分にあせるでないとたしなめた。万之助はわざと灯に背けるようにして秋草屏風の暗い方へ顔をかくしている。普段着の献茶帯を音をさせて器用にしめ終えると「あまりすゝまないようだな」と言った。

「いえ」少年ははじめて口をきいた。こゝで伊織の怒りを買ってはとの怖れが彼の心を僅かにひらかせたのであろう。「ぢゃ承知してきたのだな」「はい」伊織は万之助の前に坐って顔をのぞき込むようにした。キラリと眼に光る涙のようなものがあった。「こわいのか、どんな風に思っているかしらぬが、まさかとって食おうとは言わぬ」「おそろしくはありませぬ」「ふん、では口惜しいのか」「そう言う意味でもありません」「なら、どうしたというのだ」伊織は突然、荒々しく万之助の顔に手をかけると仰むかせた。「相変らず美しいの」伊織はじっと、しばらく見ていたが、その唇に自分のを触れた。少年は黙ってそれを受けた。万之助が抵抗しないと知ると伊織は気が狂ったように彼の衣服をぬがしはじめた。色のあせた紋付は母親の心遣いであろうか、夢中ではぎとるようにしてゆく伊織の手を制して「そんなにお急ぎにならなくても」と万之助はみずから身につけているものを脱ぐと丁寧にたゝんで傍らに置く。ひとつになるとさすがにそれを取去ることをためらった。「ほう」伊織は目をみはった。白くきめの細かい肌は若さにかゞやいて肉が締っている。ことに肩から胸にかけてしっかりと逞ましく盛りあがって少年の武道に励んでいた日常がおもわれる。それでいて優しく人の心を誘うなまめかしさをひそめているのを伊織はしった。彼は親が子供をいたわるような泌みじみとした手つきで、その体を愛撫し

た。万之助はそうされると、燃えるものが生れてくる思いで身をよじらせる。ほのかに血のいろが頬を染める。しかし、伊織が　に手をかけると、少しあらかった。此処へくる前に新しいのとかえてきたのであろう。快い匂いがこめられてあった。もう充分に発達した股のあたりの肉づきが伊織の心を妖しくとらえる。何故に自分は女でなく少年を愛するようになったのであろう。彼の回揃はいやらしい義母の思いがけない不倫の恋、豊満な肢体にものをいわせての暗い不安な日々にむかう。病身の父にあきたらなかったとはいえ、それからの彼の心は嫌悪となって女体を遠去けた。妻も決して彼の考えていた美しさを身につけていなかった。そして彼女は　った。それを幸せとして伊織は再び、妻を迎えなかった。人しれず若者を門のなかに導き入れよろこびを味った。藩でも首席家老についての地位を利用し、貧しい下級武士の金に困っているようなのを、うむをいわさず自分のものにした。そうすることにはじめこそ後めたい悔を感じはしたものの、次第に慣れ、今は相手をいかに従わせるかに心を砕いた。無理に万之助の褌の結び目をほどくとなかから、陰毛に包まれた○○はすでに息づいて亀頭をたかまらせている。これこれと伊織は大切そうに両手でとらえた。そのとたん少年は努力して傍らの灯をふき消した。庭の燈籠のあかりがぼうっと障子をすかして、あたりの風物を浮びあがらせる。伊織は万之助を押し倒して褌をはずした。少年は観念したように身を横たえて激しい息づかいになった。甘酸っぱい感触をかぎながら、伊織は今はためらうことなく少年の○○を口にした。うっと万之助は始めての経験に声をうめかせながら快楽に応えた。彼は一方の手で陰毛から太腿の方を探ぐり、もうひとつでゆたかな臀の肉を撫ぜた。少年の敏感な性器は自分の意志とは別にぐんぐん膨れあがり、巨大になり、伊織の口中にひろがったとみるまにドクドクと精液をはじきだした。それをのみほすと万之助は驚いた様子であったが、伊織の心情がすっかり判ったという風に今度は身をひらいて大胆に彼の要求に応えてきた。はじめて交す熱い口づけだった。

　万之助の豺変もようやく自分の想いが通じだかと、なおいとしくてたまらない気持のたかまりのまゝ抱きあって褥の上を転った。妙にあたゝかい夜で雨のくる気配が庭の樹戸のざわめきからも押しはかられた。この一瞬をどんなに伊織は待ちこがれたことだろう。もはや彼の頭には身分の上下も老若の距ても男同志の差異もなかった。

幼なきトロッキスト

大阪一会員

マル学同中核派の綱領は決して間違ってはいない。隆司は自らそう念じつつも、九月二十七日の日米貿易経済合同会議粉砕斗争から後、真白いヘルメットをかぶらなくなっていた。仲間が幾度も彼をサルベージ（かって活動家であったものが何等かの理由で斗争を放棄した場合仲間がその活動家を再び戦線へ復帰させようと、色々と説度すること）しようとしたが、彼は一向に斗争を放棄した理由を語ろうとはしなかった。ただ彼には、中学生来の親友が一人居た。その友も彼同様、全学連の中央委員であったわけだが、彼はその友だけに、ぽっりぽっりと斗争放棄の理由を喋り出したのであった。それは去年の夏であった。彼が未だ高校三年の時、反戦高協（中核派の高校生組織）の一員として、八月十五日、名古屋での八・一五全国高校生反戦反安保集会に参加し、名古屋での熾烈な斗いを終えて、疲れたからだを近鉄特急の柔らかいソファーにもたせて、ハイライトを美味そうにふかしていた時だった。名張辺りをすぎてうつらうつらし出した時すでに隆司は気づいて居たのだが、自分の太ももの外側を控え目に　するる手があったのである。その時はねむ気が彼を怠惰にし、どうでもいい様に思ったが、今度はそっと隣をうかがってみた。すると二十二・三才位の青年が顔を少しあからめて坐って居る。隆司は了解し得た。　に、アレだなと思ったのである。実は隆司も小学、中学生の時から、女子生徒には愛情を覚えなかった。ただ、自分より成績の良い、対等に論争のし得る女子生徒のみに、友情を感じていた。そして、何も知らない。純真無垢な、ひよわで可愛いい同級生や下級生を見ると、胸がしめつけられる様な痛みを覚えたのであった。高校に入ると、いよいよそれが昂じた。理想の少年をみつけると、恋人として片想いにふけり、体育の時間、更衣室でその恋人の着替えをじっとみつめて居たりした。そしてさらには、体育の授業をサボタージュしては更衣室に舞い戻り、その児の脱いだ香ぐわしい下着を鼻先に近づけ、一人ただっ広い室の中で若い潮の湧き出るのを待つのだった。

やがて列車が鶴橋に着こうという時、隆司はトイレに立った。客室の扉を開けて連絡部のフロアーへ出ると、先程の青年が彼の後を迫って、客室の扉を開けようとして

いた。結局隆司は、翌日、阿倍野で逢う事を約束して、仲間達の群へ帰って行った。このとき既に幼ない頃から感覚として持っていた、こうした彼の性癖が、そして温め合う体を求めてやまなかった苦ほしい迄もの願いが、具象的な形を伴って実現されるかもしれない。という強い期待が彼の胸をとらえていた。結局次の日は、隆司にとって最良の日であると同時に、若き日の曲折でもあった。とろける様な青年の愛撫に身を委ね乍ら、暑い夏の昼をホテルの一室で過ごした。それは隆司にとって、全く初めての肉体的な交渉であったのである。しかし青年は隆司に、「あんなバカな事やめろよ!」と云いすてて別れて行った。隆司が悩み出したのはそれから後であった。デモに出てもぼんやりとして、シユプレヒコールをやるでもなく、革命歌の唱和に合わすふうもなく、ただ前だけ向いている事が多く、「何んだお前、ナンセンス!、権力や反革命にやられても知らねえぞ!まじめにやれ、まじめに!」と、仲間が良く注意したが隆司のそうした状態は直らなかった。隆司が機動隊のリンチによって重傷を負ったのはその頃であった。十・二一国際反戦統一行動のその日、梅田の人民広場は青い菜て葉服と白いヘルメットが入り乱れての修羅場であった。その中で隆司は、機動隊一個中隊に取り囲まれ、　るけるのリンチを受けこのである。ヘルメットをはがされて、かたい樫の警棒が彼の頭を打した時、一条の赤い筋が彼の額から流れ落ちた。彼が怒れる人となったのはその時だった。頭部に裂傷を負い大腿部を三針も縫う様な大怪我をし乍ら、手錠のまま機動隊員の手をふりきって逃走した彼は、それから後、三月、三里塚、四月　四・二八沖縄奪還斗争、五月　愛知訪米阻止、六月　アスパック川奈と、目もくらむ様な斗いを常に最先頭に立って斗い抜いた。京都にあっても、若干十九才乍ら、中核派の全軍を率いて民青や機動隊と衝突し、学内に於いても、全共斗幹部として、教授や民青を脅えさせ、ゲバの太田と云へば誰一人として知らぬ者はなかった。その頃の彼は、全く自らヒロイズムに酔い痴れて居た。日常の彼の活動がよけい彼を増長させていた。現地斗争のため、東京等へおもむいた時でも、京都大学で、民青や機動隊とゲバルトをやる時でも常に行動隊長として、中核派軍団の先頭にあった。ということもそうであったし、実際、彼のアジテーションは誰が聴いても天下一品であったのである。しかし、八月全学連定期全国大会の会場で、隆司が全日本学生自治会総連合

総連合中央委員と云う、いかめしい役職を付与された頃から、彼は学校へ来ても、ボックスには顔を出さなくなっていた。彼には、その頃から年下の庇護者が居たのである。権力のリンチを受けてから怒れる人となった隆司に、再び高校の時、あの名古屋からの列車の中で味わったような斗争と、それとの迷い、もっと正確に云えば、一種のディレンマとも云える感情が襲っていたのである。北条悠一と云うその少年と隆司はバリケードの中で知り合った。退屈なバリ生活の所在無さに話がはずむうち、彼はその少年が同類であることを知り、その夜窮屈な寝袋から抜け出して、ふるえる手で少年を抱いた。少年の麗わしい顔貌は隆司を極度に興奮させ、少年の初々しい裸体は長いバリ生活で、張り切れんばかりの隆司の情欲を充分満足させた。行為が済んだあと、隆司は一生、この児を離さない。と誓った。その少年は、全共斗の一員ではなく、単なるシンパ（ジンパサイザー＝共鳴者、同調者）であったため、バリが解除されると、大学の近くの下宿へ隆司を呼ぶようになった。一週間経ち、二週間経ち、二人は講議も出ず、昼間でさえ、カーテンを閉じた狭い部屋の中で、お互いの存在を確かめ合った。こうした　気たる行為の中で隆司は浮んだ。それは自らの思想と、現実の性の営みとのディレンマと呼ぶには、あまりに深刻すぎた。もとより彼は本好きな少年であった。しかも中学生の頃より、理屈っぽく、小難かしい書物ばかり漁る様になっていた。漱石後期の作品から、転々と日本文学を読み漁り、果ては、フイヒテ、キルケゴール、ニイーチエと、書物は哲学書の類へと移行して行き、自ら〃自己追求〃に酔い痴れた。やがてそうした彼の読書癖は、自分でも分らぬ間に、マルキシズムへと移って行ったのであった。従って彼は、自ら斗争に投企したことが、自分が成した〃自己追求〃〃自己否定〃に依るものだ。と誇示する様になったが、本来の斗争と云うものがそうした、一個人のめざめから発するものであってはならないと云うことは、マルクスの著を既読された人には周知の通りである。こうした彼の理論家を自称し乍らも、理論脆弱な活動が、彼のその活動そのものを崩壊させるに長くはかからないのもうなづけるのである。

そして、それに加えて、またしても彼の脆弱な理論で裏づけられる少年愛に自ら酔い痴れ、生じ理論で生きることを誇りとする。幼なき唯物論者にしてみれば、少年愛を理論で裏づけることが出来る、ということを大義名分として、自信ある、つまりは決して間違った生き方では

ないという自信のある性の営みを続ける事が出来たのであろう。しかし乍ら、一方で、もろくも崩れようとしている真摯であるべきはずの斗争に、唯物論者を自称し乍ら人情的に未練がましく思っている自らとのテイレンマが彼をして苦悩の人とせしめた。

しかしすでに隆司は、その小年の忠実なる下僕となっていた。少年の生活が苦しくなると隆司はバイトをしたり、かなりのブルジョアである伯父達から金をねだっては少年に貢いでいた。そんな彼が斗争から離れて行ったのは当然と云えば当然だったかもしれない。

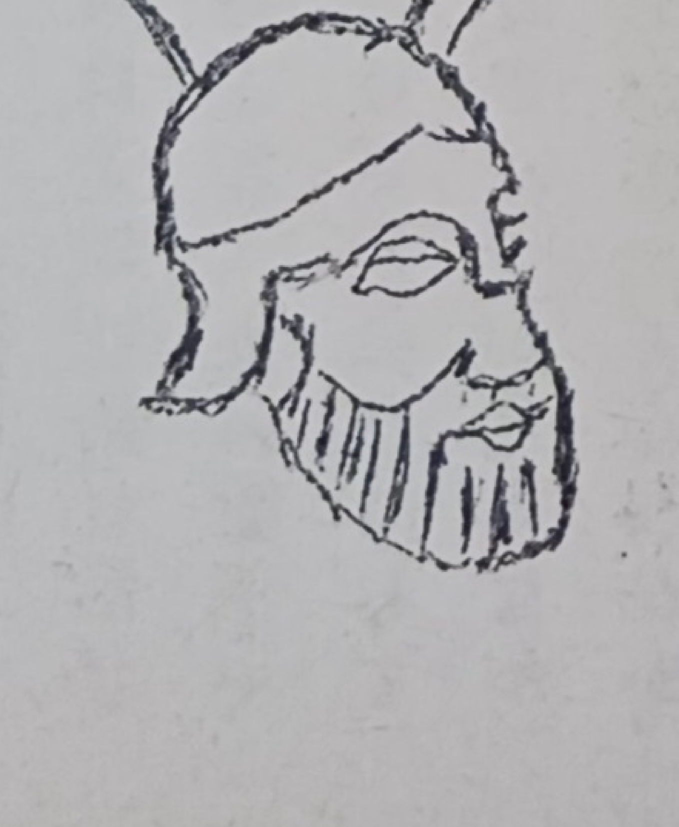
しかし何度もくり返す様だが、彼は全く混　とした頭をかかえ、悩める人となり果てて居た。理論をこの上もなく崇拝して生きて来た彼が、今、ただれるような日々の陰湿な少年との生活に疑いをもちつつ、斗争に復帰するかも知れないという。自らの心の放浪性に対する危倶、と、甘美な快楽に酔い痴れて真摯に生きる事を　う怠惰とが自らの全てだったことを思い知らされ乍らも尚、四帖半の万年床で裸身のしなやかな少年とからみ合っている。サルベージをあきらめた隆司の中学生来の親友も、十一月東京へ発ち、多くの同胞が血にまみれているその中で、隆司は少年と自らの白い血に鳴咽した。白い血にまみれ乍ら、隆司は慟　とも思えるすすり泣きを発し、〃あわれな、幼なすぎるトロツキスト〃と自らを語るのだった。

× × × ×

(2) 萬博を必ず見ませう

あなたの一生の中で日本で万博が開催されることが何回あるでせうか？　とに角、世界の主だった国が七十ケ国以上も参加して科学文化の粋を一堂に集めると言うのですから世界一周旅行をするよう、尚効果が得られるのではありませんか。最近のそれ等の分理の発達は目ざましいものがあります。

視理を広め今後の生活に役立てる為に是非一回と言わず二、三回は見物しませう。



ノン・フイクション

愛の半生記（前編）

富山県　富岡　生

I　学芸会のスター

昭和十年、中村輝彦は小学四年生であった。小柄で丸顔の目の大きい坊や。学芸会の花形であり、この町でも裕福で知的な階級に属する家庭の子供であった。成績はクラスでいつも二番か三番で副級長にもよく選ばれた。相当に大きな小学校だったが、先生の中で輝彦を知らない人は居ない程、可愛く、人気者で、輝彦が職員室へ入ってゆくと、どの先生からも声がかけられた。先生達は、組主任は勿論、その他の人でも他の生徒を呼ぶ時のように、「姓」を呼ばず殆んどは「輝ちゃん」と名前でよびかけた。

輝彦はこの頃、休み時間になると、二部屋程離れている六年生の教室の前へ行っている事が多かった。そこに「小野さん」という、多分他の町から転住して来たのであろう、幾らか都会的な容姿の男の子が居り、いつどういう事でそうなったのかわからないが、その「小野さん」とは、いつの間にか遊び仲間（と云っても学校の廊下で、休み時間だけの）になり、しかも輝彦は元気、余り活動的な遊びをする方ではないのに「小野さん」とは廊下で相撲のように組んずほぐれつ、上になり、下になりして転げ廻るのが常だった。そして「小野さん」が見えなかったり、居ても同級生と一緒で輝彦をかまってくれなかったりした時、随分と淋しい思いをしていた。何を話したという事も憶えていないし、勿論校外で遊んだ事も、彼の家へ行った事もないのである。頭に残っているのは、黒い小倉の金ボタンの学生服の二人。輝彦は半ズボン、彼は長ズボン、この黒いかたまりが廊下をもつれ合って転げ廻ったという事と、その時の彼のポッテリとした肉感だけである。その後、彼は中学校へ進学し、輝彦が六年生になった冬、裏山へスキーをする為にクラス全体で出かけた途中、スキーをはいてこちらへやって来た彼とすれ違い、胸をときめかせた事が一度あった。人一倍内気な輝彦であり、しかもクラスの者と一緒だから恥かしくて何も云えず、かえって同級生の陰にかくれる様にしてしまった。その内に彼の一家がこの町を離れた事を風の便りで知り、何かの折、彼が住んでいたという家の前を通ったりすると、「小野さん」との事が甘ずっぱい想

い出としてよみがえってくるのであった。これが輝彦の感じた最初の「恋心」であった。

輝彦は、学芸会に出演しないことはなかったし、それが全部「主役」ばかりであった。低学年の間は、レコードの童謡にあわせて踊る「音楽遊戯」、五年生では「いなばの白兎」の劇で、主人公の「白うさぎ」、六年生では、合唱の中の「独唱者」という風であった。今でもアルバムに残っている一枚の素人写真。小学校の運動場で、パンツと運動帽、そして当時としては他に誰に着ていなかった、前明きがファスナーになっている白い編みアンダーシャツ（輝彦の長兄が東京で会社勤め、次兄が東京の学校に在学中という事で割と都会的なものが家庭に持ち込まれていた）姿でカメラの方をむいて笑っている輝彦。当時は日中戦争が始まり学科と共に体力検査が中学の入試に含まれ、運動能力テストとして「百米の疾走」「ボールの投てき」等が加えられていたので、その練習の時のスタイルであり、これはその練習場へ、持っている人の少ない、恐らく買ったばかりのカメラを持って出て来た、若い独身の男の先生が、同級生が側に沢山居たのに、輝彦だけを写してくれたものである。この若い先生は、五年生で劇の主役をやった時に、その指導と演出をしていた人であった、彼のフェイスは輝彦の好みにあわなかったが、やせ型で長身スマートな容姿に輝彦の関心がよせられていて、そのズボンの前のふくらみなどに熱い眼を注いでいたのであった。この一枚の写真を眺める度に、「あの先生、僕のことを思いきって可愛がって呉れたらよかったのに　―」と残念に思えるのである。

Ⅱ　恋の中学生

輝彦は、昭和十三年、県下で第一流の名前校であるある県立中学校に無事入学した。早速、誰に誘われたわけでもないのにさっさと「音楽クラブ」に入った。そしてここで入部早々に、二年生の「山本」という上級生の魅力のとりこになってしまった。色白で、目が大きく、長身、やせ型という、輝彦好みの型で、体に直かに響くような低いバリトンの声は、輝彦をしびれさせるのであった。

中学校まで国鉄で二駅間の汽車通学が日課に入って来た。同級生の一人で、二駅前から通学している「棚田」という生徒。一年遅れて入学したという事だが、農村出身のためか、純情・素朴で、「剣道部」に入っていたが

荒々しい所がなく、下校時、「音楽クラブ」で遅くなった輝彦と、「剣道部」で遅くなった「棚田」が同じ汽車になると、輝彦は向い合って坐り、彼の顔を見つめ乍ら取り止めのない話をして帰るのが大きな楽しみとなった。そして、汽車の振動などで、向きあっているひざがふれ合ったりすると、電気に打たれた様に、快感が体の中を走った事をおぼえている。

輝彦が四年生の時、音楽クラブの恋人「山本」がある事情のために他の中学へ転校するという事件がおきた。「クラブへ行けば会える」というので、具体的な行動を取らなかった輝彦も、顔が見られないという事になるととうとう「山本」宛に「恋文」を書いてポストに入れたのであった。

中学四年生の七月の事である。だが「同性愛」などという言葉も知らず、まだ知っていたとしてもあからさまに書ける勇気はなかっただろうし、「一年生の時から慕っていました。兄さんになって下さい。」と書くのが勢いっぱい。「僕の様な者をそんなにまで思ってくれてはとても心苦しいが、希望にそいましょう。」という返事は輝彦を有頂天にさせた。そして夏休み中には彼の家まで遊びに行つて、顔を眺める事で満足して帰って来た。

愈々中学五年生になり、「棚田」とも随分親しく話し合うまでにはなったが、核心にふれる交際にまでは至っていないし、「山本」は東京の音楽学校へ進学して簡単に会えなくなっていた。そして、そろそろ下級生に眼が向く様になったのである。一年生の中の、「服部」という、眼の涼しい、色白な坊やの面影が輝彦の心にしのび込んで来た。内向性で、非社交的な輝彦にはとても面とむかって話しかけるなんて事は出来ず、遠くから眺め、坊やのカーキ色の制服の内にあるものを想像してみるだけであった。だから輝彦の中学時代は、充分に満たされぬものがあり、当時は少なくとも一日に一度は、（ひどい時は二・三度）行なっていた「自己愛撫」（これは、小学六年生の受験勉強の時、夜ひとりでおきていた時に初体験。既に射精があった。）の際に、「山本」「棚田」「服部」の肉体を思いのまゝに愛撫し、愛撫されることを想像して何とかまぎらわせていたのであった。愈々卒業式も終り、音楽学校の入試に上京するばかりになった。輝彦は、「棚田」と「服部」との間を何とかしたいと思い、二人に手紙を書いた。「棚田」には、中学入学以来ずっと愛を感じていたことを告白したが、彼からの返事は、「少しも知らなかった。かんにんしてほしい」と如

何にも彼らしい素直な手紙で輝彦を満足させたが、彼とは終りまでそのものズバリの交渉はとうとうもたず、現在、彼は輝彦の数少ない親友の一人となっている。

「服部」の坊やも返事をよこしたが、手紙の交換だけで、坊やの中学高学年、高校時代、大学時代と一度も顔を合わせた事がなく、今から十四年程前の正月に、不意に訪ねて来て、一度で大人になった坊やを見て、いささか幻滅、これも何もなくすぎ、今も季節の挨拶状が来る同窓の後輩という関係になって続いている。

こうしてふり返ってみると、すべて輝彦ばかりが恋をして、能動的に動いているばかりで、恋された事が一度もないというのは本当は少し変な話で、かっては小学校の若い先生が眼をつけた様に、上級生の対象にならない筈はないのだが、何しろ内気で余り口もきかないし、顔付きにキリッとした所があり、更に富裕な家庭の息子と云うこともあって、上級生、同級生が気安く近づけなかったのではないかと思われるふしもある。ところが、輝彦が卒業式を終った翌日、中学五年間、一度も同じ組になった事もなく、まして話をした事もなかった「清水」という同期生から、求愛ともとられる様な「卒業祝い」の便りが届き、驚ろかされた。可哀想にも返事さえ出さなかったし、現に夢中になっている対象が二人もあったのだから——。

Ⅲ 愛の開花

輝彦は東京で、音楽学生としての生活を始めた。一年先に上京して、小さな音楽学校に一まず入っていた。中学生時代からの恋人「山本」も同じ音楽学校を受験し直したが、気の毒にも彼は落ちて了い、元の学校へ戻って落ちつく事になった。

輝彦のこの時代こそ彼の性向を満足させ、そして最も充実した時であった。世の中が太平洋戦争と共に深刻化し、食糧難、空襲、応召、即日帰郷、代用教員、終戦、復学、食糧欠配、と身辺は実に物凄い狂乱の歴史を重ねるのであるが、音楽学校の同級生の中から一人の愛人を得たことで、輝彦が永年夢に見、欲求し続けた「同性への愛情」がガッチリと受けとめられて、花をひらいたからである。

「愛人・大井」は、東京のミッション系の大学の中等部を卒業して入学して来た。背が高く、色白で面長。眼が大きくきれいで、少し段があるが高い鼻、そして形のよいポッチャンとした唇と、こぼれるような白い揃った

歯並みを持ち、どこか乙にすましている様な所がある反面、いかにもヤンチャな甘えん坊といった、東京の名門私学の典型的なお坊っちゃんタイプであった。

クラス代表の役をしていた、東京の商業学校出身の如才のない男生徒から、「大井」の住所を聞き出して、輝彦が「恋文」を書いたのは夏休み後の秋の事であった。手紙が着いた頃、「大井」が輝彦を、ピアノ練習室へ誘った。一坪半ぐらいの広さの所にピアノが一台、こういう室が両側に、五・六室づつ並んでいて、両隣り、向い側から、ピアノやヴァイオリンの音、発声練習の声などが騒々しく入り交ってきこえてくる。その中で、彼はポンとピアノの鍵盤の上へ輝彦が彼宛に投函した、「白い封筒」を置いた。「あゝ、もう終り！」輝彦の胸は破れんばかりに鳴り、頭に血が上って逃げ出したいくらい。「こんなあとで証拠になる様なものは返しておくよ。僕中学生の時に、上級生から誘われた事があるからこういうものを貰っても驚かなかったけど。君の気持は良くわかったが、交際するかどうか、今すぐ返事はできないよ」と如何にも都会育ちらしく、落ち付きはらって話をする。それに対して輝彦は唯うなずいているだけ。そして彼が中学時代に、上級生の対象にされたという経験があり、如何にも体験者らしく振舞って輝彦を辱かしめたりしなかったのは、まったくの幸運であった。彼とはそれからは、ごく自然に近ずいてゆき、その年の暮に、学校から国電の駅へ勤労動員でかり出された時も、二人同じ持場で働いたし、輝彦の家（といっても長兄の家に同居していた）へも他の同級生と遊びに来たりしている内に、益々彼に傾斜してゆくのであった。

一年生も終り、二年生になる春休みに、長兄は応召してゆき、義姉と子供は輝彦の田舎の家へ引きあげてしまい、折りよく東京に住んでいた父の姉の家に下宿することになった。その叔母の家に越して間もないある日曜日部屋の外をフト見ると、道のむこうに「大井」がたっているのが見え、輝彦はアッと息をのんだ。転居先の住所は話してあったが、まさか彼が訪ねてくれるとは夢にも思っていなかったのである。部屋に入って来た「大井」は開口一番、「此の間から長い間かかって考えていたんだけど、君の望み通り交際する事に決めたから、やって来たんだ。」と云う。先に窓から彼を認めた時のショックにあわせ、この言葉は輝彦を興奮のるつぼに追い込みズボンの下の「男性」は狂おしくあえいでいた。しかし内気な輝彦にとり、真昼間、鍵もかゝらない下宿の二階

で、どんな愛情表現ができようか。こうして彼との仲は急速に親密になり、一回目は奥多摩へ、二回目は静岡県の三津海岸へそれぞれ一泊の小旅行に二人連れで出かけるまでになった。いずれも彼が旅費、宿泊費を負担し、弁当まで用意してきて呉れたこの、二回にわたる一泊二日の小旅行の間でも、輝彦には彼を要求する勇気がなくお互いに別々の床で朝までおとなしく眠るだけであった。この頃の輝彦は、とに角、彼が自分の気持を認めた上で交際しているんだと云う事だけで満足し、これ以上要求して若しも彼を失ったら……という恐れが強かったのであろう。

九月になり叔母の家の都合で、他に下宿を探して出なければならなくなった。「大井」が下宿探しをして、彼の家から歩いて六、七分のところにある下宿屋の二階の六帖床の間つきの部屋を、二食のまかない付きで契約して来てくれた。愈々引越しという日の前日、彼は輝彦をその下宿の小母さんに招介し、それからはじめて彼の家へ連れてゆき、夕食の接待をした。当時、客に食事を提供することは物資不足の折から、仲々大変な事であり、しかも輝彦が御馳走になったものはまことに豪華な料理で、ここでもすっかり「大井」の情に参ってしまったのである。

引越し当日、彼は手伝いに来て、輝彦と一緒に下宿で夕食をたべてゆけと小母さんにすゝめられ、階下の食堂で何くれと小母さんに話しかけ乍ら食事を済ませ。又輝彦の部屋へ坐り込んだ。九時半も過ぎた頃、彼は「今日泊って行こうか。」と云い出した。

布団は一組だけで勿論シングルである。輝彦は以前から習慣で、パンツ一枚の素肌に寝まきを一枚着て寝、彼は下着のシャツとパンツ姿でその横へ入って来た。輝彦は、左脇を下に、彼は右脇を下に、お互いに顔を向き合わせて横になっていた。真暗の中で、輝彦の「男性」は正にパンツをも突き破りそうな状態で息づいて来た。それを彼に知られまいと腰を引き気味にし、荒くなってくる息を何とかして抑えようとしている所へ、故意か偶然か、彼の片手が輝彦の興奮しきっているものにふれてしまったのである。「アッ」と小さな叫び声をあげて更に腰を大きく引こうとしたその時は、既にパンツの上から「大井」の掌は輝彦の固く脈打っているものを、やわらかく包んでしまっていた。「何だかさつきから変な姿勢だと思ったら、こんなになってたんだね。恥かしがる事なんか何もないのに。」と優しいバリトンの声をきく

と、輝彦の抑制されていた欲情は、せきを切ってしまった。いきなりむしやぶりついてゆき、彼の唇をむさぼる様に吸い、矢張りかたく怒張している彼のものに自分の腰をおしつけていったのである。彼も輝彦のものを握っていた手を離すと、両手で輝彦の顔をしっかりとかゝえ唇を吸いかえして来た。お互いに舌を入れたり、入れられたり、鼻息も荒く愛撫し合っていたが、とうとう二人共、着ているものを全部脱ぎ、相手の「男性」を握り、忙がしく上下運動をはじめ出した。「大井」のペニスは容姿の上品さに反比例する様に太く、かたく、たくましく、しかもグランスが完全に露出しているので、その見事な事は輝彦の狂喜を更に激しいものにしたのである。遂に輝彦は体をずらして彼の「男性」を口に含んでしまった。長い間欲求し続けたことが、今こそ気兼ねすることなく、思うがまゝに、しかも輝彦の好みにピツタリの容姿を持ち、更に素晴らしい「男性」を持っている「愛人」を対象にして行なえるのである。輝彦の満足感と幸福感、そして興奮はいやが上にも高まってゆくのであった。優しく彼のグランスをなめまわす輝彦の舌、そして彼のファウロスをしめつける輝彦の固くあわせた唇。輝彦の片手は彼のものを支え、片手は彼の腰をまさぐる。輝彦の鼻や、唇をくすぐる彼の密生した剛毛、輝彦の「男性」は濡れて、宙にあえいでいた。荒い鼻息と共に時々ウメキ声を洩らしていた彼もとうとう最高順に達したらしく、鋭く短い歓声と共に輝彦の口中へその愛液を噴射した。愛する者のエキスを、いとおしさをこめて呑み込んでやがて彼のものを口からはずした輝彦は、相変らず張り裂けんばかりに怒り狂っている「男性」を、今の射精で少し柔か味を帯びて来た愛人のものの上にピッタリと重ね、又も彼の唇を求めて行った。「ねえ、僕のもー。」という輝彦の訴えに「大井」は、やゝ両足を開き気味にあおむけに寝て息をはずませているもののシンボルに彼の手をそえて、しずかに愛撫動作をはじめた。「愛する者に愛されたい。」という輝彦終生の願いが今ここに成就したのである。

「もう死んでもよい」「これこそ永年熱望し、○れ求めていたものなのだ」と夢うつつをさまよう様な快感の中に、輝彦自身の腹の上に、そして彼の掌の中に思い切り精液を放出してしまった。こうして翌朝三時頃まで、ペーゼ、愛撫、射精をお互いに何度も繰返していたが、その間、二人の「男性」は、射精直後は幾分柔かくはなったが、完全には○まず、眠りにつくまでエレクトの状態

をずっと続けていたのである。翌日は、一日中、会陰部から腰にかけてケダルイ感じがまつわりついており、唇は荒れてカサカサ、舌の根が痛くて自由に動かせないという、後遺症状が残ったが、それは輝彦にとって昨夜から今暁にかけての、甘い楽しい、あたかも「結婚初夜」とも云えるものの名残りであり、「愛の証拠」とも云うべき嬉しいものでもあった。

こうして十八才の輝彦と「大井」との「愛の生活」がはじまったのである。それは昭和十九年の十月の事であった。朝、彼が下宿の玄関へ呼びに来る。そして二人は国電、私電を乗りついで約一時間半で学校へ着く。何かの都合で彼が遅いと輝彦の方から呼びに出かけ、彼の家まで行きつく事もあり、途中で会うこともある。学校では二人掛けか三人掛けの椅子だったから必ず並んで講義をうける。

休み時間は勿論一緒にすごす。昼食は一緒に外食に出るが、時には彼が家から二人分準備して来た辨当を、ピアノ練習室の二階で二人っきりで食べる。ここは下の練習室と同じ部屋だが、まだピアノは入っていなくて、〇楽などの練習に使われ、長椅子があったり、個人椅子があったりした部屋がやはり十室ぐらいあった。殆んど他の生徒は上って来ない。学校内での盲点とも云える場所であり、窓は全部スリガラスだったから閉めれば外からは見えなくなる密室になる小部屋である。ここで愛するものと水入らずになると、輝彦は自分を抑える事ができなくなり、扉に鍵がかゝらないのにもかゝわらず、彼と抱擁ペーゼをしたり、時には長椅子の上に彼を寝かせてズボンのボタンを二、三個はずす程度の状態で彼のものを愛撫したり、口に含んだりした事も度々であった。そして不思議にも、彼の方からこの様な愛撫行為を求めた事も、しかけて来た事も殆んどなかったにかゝわらず、（これは学校内のみならず、輝彦の部屋、彼の部屋、昼間、夜間、又、同〇中でも）輝彦が愛撫動作を始める時は、いつでも彼の「男性」はそれを受けとめ得る、エレクト状態になっていたという事である。勿論、彼を求める輝彦に対してそれを拒否した事は只の一度もなかった。

放課になると二人一緒に校内を出て真直ぐ帰宅する事もあり、又、途中の乗換え駅で街へ出ることもあったが、とに角、輝彦の下宿近くまで帰り「じやあ」という別れの短い言葉も口に出して云ったかどうか。一寸右手を軽くあげる程度で別れる。夕食が済むと、殆んど彼の方から輝彦を訪ねて来た。ウイークデイの夜間、輝彦が彼の

を訪ねた事は恐らくないのかも知れない。
そして九時半か十時頃まで、無駄話をしたり、ピアノを弾いたり、歌をうたったり、そのうちに輝彦は、彼が欲しくなると畳の上にジカに寝てもらって愛しはじめるのであった。一度、やはり彼の頭の下に坐布団をおいただけで、ズボンもおろさずに前割れから彼のものを出して愛撫していたが、その内に彼の着ていたジャンバーの上へ発射させてしまい、二人であわてた事もあった。土曜日になると彼は輝彦と一つ布団で泊って行く。そして翌日の朝食を輝彦と一諸に下の食堂で食べてから帰って行った。そして夕食後また輝彦の部屋へ顔を見せるというのが、一つのしきたりになったのである。…何の事はない、同せい一歩手前の夫婦生活そのものであった。

ところが二年生も終りに近い三月の下旬、とうとう輝彦に召集令状が来たという電報が田舎の母から真夜中に届いた。田舎へ帰る前に、千葉県に居た姉のところへ別れにゆくことを思いつき、翌朝四時頃、彼宛の手紙を玄関の戸のすき間から投げこんで、始発電車で千葉県の姉のところへ行き、一泊して帰ってくると、彼が来て待っていた。「一諸に田舎まで送ってきて欲しい。」と手紙で彼に要求していったので、その打ち合わせをし、二人で満員の夜行列車に乗り込んで、輝彦の田舎へ行った。入営前日の夜、二人は別れを惜しんで泣き、そして愛し合い、確め合った。入営当日は、母と彼が途中の駅まで送って来てくれ、田舎の小さな駅で手をふって見送る二人。これが輝彦にとっては見納めになるかも知れなかったのである。所が東京での不充分な食生活と空襲などによる疲労のためか「心臓辨膜症」という事で「即日帰郷」になり、再び二人に会う事ができたのであった。当時東京は連日の空襲で痛めつけられ、戻っても満足な学生生活が送れる保証は勿論無く、生命の危されもあった。それで母の願いもあり、上京を見合わせた輝彦は、四月から田舎の小学校の代用教員として勤める事になった。東京の彼へもその旨知らせると、早速、運輸事情がひどく乗車券の入手が困難な時期にもかゝわらず東京から輝彦の家へやって来たのである。多分三、四回往復した筈である。そのうちに、この地方にも空襲がはじまり、この田舎の小学生にまで縁故疎開がすゝめられるようになり運動場は、いも畑、野菜畑と変っていった。輝彦は、田舎の小学校のヤンチャ坊主の相手に疲れ、たった四ケ月で七月末の第一学期終了と共に退職してしまった。やがて終戦になり、九月に入ると東京の学校から「十月授業

開始」の通知が届き、輝彦は上京して以前の下宿にまた戻ったのである。そうして彼との生活がまた再開された。

ところがこの水入らずの生活の中へ、一人の人間が入って来たのである。と云うのは、同級生で、中国地方から来ていた「満田」が復員、復学したが下宿がみつからないとの事で輝彦の部屋へ同居することになったのである。出征前に、他の級友よりも親しくしていた事でもあり、事情が事情なので、とに角、小母さんの諒解を得て二人で住む事にしたのであった。善良で、やゝ消極的な「満田」は、中肉中背の、如何にもおっとりとした、田舎出の坊やといった男で、容姿も十人並みだったが、輝彦の好みの対象ではなかった。彼の荷物が届くまで一つの布団に寝たが、お互いに背中合わせで眠り、輝彦は心身ともに平静に毎朝を迎えていた。唯、困るのは「大井」との事であり、「満田」が風呂に行ったり、散髪に行ったり、映画へ行ったりという留守の機会を狙うより仕方がないことになり、しかし登、下校にも三人一諸という形が生まれ、校内の生徒からひやかし半分に「0駅三人組」と、乗ってくる国電駅の名前のついた仇名で呼ばれる程、一体の行動が非常に多くなったのである。こうして音楽学校三年生の後半は、「三人組」で始まり、彼との交渉は以前程ではなくなったが、輝彦の彼に対する愛情は依然として強いものであった。その内、輝彦の隣りの部屋が空き、「満田」が移り、「大井」が土曜日の夜は輝彦の部屋に泊ってゆく習慣が、また復活した。しかし今度は、「満田」の事もあり、毎週確実にというわけにはゆかなくなっていた。三人一諸に集まって、駄辨るのは決まって輝彦の部屋で、「満田」の部屋へ三人集まる事もなかったし、輝彦が「満田」の部屋へ入り込むことも、「大井」が話し込むこともなかった。まして「大井」が隣りの部屋へ泊る事もなかったし、又、「満田」も「たまにはお礼の部屋で泊ってゆかないか。」」等と誘った事も一度だってなかったのは、不思議だと云えよう

愈々最上級の四年生になり、終戦後はじめての新入生が入って来た。その中で、髪の毛がナチュラル・ウエーブで、色白の、物すごくハンサムな「水谷」という子が輝彦の目をまぶしくさせた。テノールで無邪気に同級生と話しているのをみると、「可愛い坊や！」と叫ばずには居られない。輝彦であった。

この事を、こともあろうに「大井」に打ちあけた所が、彼は「水谷」が入学前に、声楽の先生の家へ受験準備のレッスンに来ていた頃に顔見しりになって、言葉を交わ

す間柄だと云う。輝彦は彼にねだって、「水谷」の写真をまず一枚撮影してくれることを承知させた。学校の前庭で、黒い上衣に、白いズボン姿で（と云うと六月頃）笑っている「水谷」の大きく伸ばした写真は、今でもアルバムに残っている。しかし、写真を眺め、実物をよそ乍ら鑑賞しているだけではもう納まりがつかなくなった輝彦は、とうとう彼から「水谷」の住所をきゝ「歌舞伎」の切符を同封して誘ったが、当日、隣りの座席へ来たのは「水谷」の母であった。しかしその後、手紙の交換はする様になり、。輝彦が卒業後、上京した時に「水谷」の家を訪ねている。「水谷」は卒業して「東宝」に映画俳優として入社したが、持病のためか一向に芽が出ず、今年とうとう退社して、商事会社の役付き社員に転身したのである。「水谷」には全然「ホモ」の気配はなく、かって年長者に誘われて、手ひどく断わり、その人の事を悪しざまに話すのをきいて、輝彦は、愛の対象にすることをあきらめたのであった。

その「水谷」の同級生に、「砂川」という色が浅黒くノッポで引きしまった筋肉をもち、すごく明朗快活な坊やが一人居るのを発見した輝彦は、この坊やにグングン引っぱられて行ったのである。

そして輝彦は、下校の私電の中で直接話しかけ、その日喫茶店でお茶をおごるところまで行った。思った通りサッパリとした気持ちの良い如何にも東京育ちの坊やで、「砂川」も輝彦とは「先輩」として交際してみたいような様子であった。こうして学校の行き帰りに「砂川」とデイトしてお互いを知り合い、そのうちに「砂川」は自分の家へ「輝彦」を誘い、下宿をも訪ねる様になるのである。妹が一人居るだけなので、輝彦のことを純粋に「兄さん」の様に思って親密さを現わす様になり、「僕とだけつきあう機会が多くなって、「大井さん」や「満「田さん」との間を引裂いてしまったようで、あの二人の人達にとても悪いことをしている様が気がするんだけど」などという事まで輝彦に云うのであった。「可愛いい弟！」と輝彦も思う様になり、肉体を愛撫したいという気持はそんなに強くはならなかった。その間も「大井」との愛は続いており、輝彦は、彼にはすべて何事でも話をしてしまうので、時には彼から「砂川の坊やとはどうなっているんだ？」などと尋ねたりしていた。

こうして輝彦の東京での生活は、「大井」との愛をベースにしてやがて終りに近ずいていった。所がここへ、田舎の中学の二年生の時に、大阪から転校した「中尾」

という生徒が居たが、（それも卒業の時は、同じ中学には居なかった）それから一度合ってほしいという手紙が届いたのである。Ｒ大学の学生になっており、下宿の地図まで書いてあったので、とに角訪ねてみた。この「中尾」については、一、二年間しか同じ中学で学んだだけで、しかも在学中に特に親しく話をしたり遊んだりした覚えはなかった。が、彼が輝彦の中学から姿を消したその夏休みに、輝彦の同級生を案内にたてゝ、突然訪ねて来て、外へ呼び出された事が一度あった。その時も随分と輝彦はとまどった。同じ学校に居た時も友達という程でもなかったのに、何らかの事で校則を犯した為に転校せざるを得なかった不良の生徒が、どうして僕を呼び出したりするのだろうと。その時、別に彼は輝彦を恐迫したり、おどしたりしに来たのではなく、輝彦に会いたかっただけであったのであろうか、何となく会って何となく帰っていってしまったのであった。この中学生の時の事と、東京での事を今になって考えてみると、若しかしたら「中尾」は輝彦に愛を感じていたのではなかったのだろうかと思われるのであるが、その時の輝彦はその唐突さにうろたえただけなのである。その「中尾」とは、卒業間近かの頃に、二、三回ゆききをし、輝彦は彼を「帝劇」の藤原オペラの公演に誘ったりしただけである。

亦、終戦以前の事であるが、一つ上の男生徒から誘いの手紙を貰った事も一度だけあって、その人の部屋へ遊びにも行ったが、好みではなかったし、もう「大井」との愛が結ばれていた時でもあったので、輝彦はそれ限りで、冷淡にあしらっていた。

愈々、輝彦、「大井」「満田」は音楽学校の卒業式を迎えた。まこと「０駅三人組」の呼び名はふさわしく、卒業式当日は三人揃って遅刻し、式の終り頃に漸く式場へすべり込んだのであった。

輝彦は、校長のすゝめる東海地方の女学校の先生の勤め口を断って、田舎へ帰り、母と暮すことに決めた。帰国の前夜、「大井」が輝彦を訪ね、そして泊った。長い愛情生活であり、「夫婦別れ」の様な夜であった。翌日、帰りの汽車時間まで一諸にすごした彼は、駅へ向う輝彦と、下宿の前で握手をして、彼の家へ帰っていった。駅まで送りに来るという彼を断わったのは輝彦であった。恐らく田舎では、「大井」とのような生活は望める筈がない。それならば、未練は成る可く早くたった方がよいというつもりであったのだろうか。誠には「砂川」の坊やが来て、あたかも「出張」にゆく兄貴を送りに来たよ

うに、晴ればれと、明るい表情で笑顔を見せ、「気をつけて！」とホームから窓ごしに手を差し出したのである。

× × × ×

同封のアンケート用紙に協力を

毛利

会員の方で京都に住んで学校経営のかたわらセックストラブルの研究をしておられる方がありまして今迄何回も私もお会いして意見を交換しておりますが今回同性愛者の多数の人のアンケートを得たいとの希望がありまして、丁度私も兼ね々々より折角のこうした会が存在して真面目な会員の方が大勢おられるのであるからこうした調査を集計して置けば将来の研究に大変に役立つと思いまして私の一存でしたが協力を約束しました。名前其他は一切記入して頂だく必要はありませんから真面目に所定の欄に記入して御返送下されば幸いです。会員及び当会の不利益になる様な事には絶対に使う筈がありませんから安心して協力して下さい。そして早急に返送して下さい。集計は出来るだけ会誌に追って発表致し度いと思っております。

大阪 M H 生

これが同好者の弱さと言うものが吉田は毎日会社え出勤する途中でも必ず大阪駅の東口にあるトイレに一寸立寄って見る事が習慣の様になってしまっていた。時に自分乍らもう五十の坂を越えてこんな気持ちでこゝを素通り出来ない自分を情けなくみじめな気持ぢになる事もあったが足はどうしてもそちらの方に向いて歩きだすのだった。大阪駅に着くのが朝の丁度八時十分前そしてトイレに寄って地下鉄に乗るこのコースをもう何年間もつゞけていた。四月も半ばで皆んな浮き々々して足取りも軽く職場に急いでいる人が列をなしていた。吉田はその列より一人外れて例のトイレに向って歩いて行った。細長いトイレで両端が入口になっているので大抵の人はその入口に近いところで用を済ませて足早やにそこを去って行く、トイレの中間まで行ってのんびりと用をたしている人の中に同好者が割合に多いことはこゝの常連の誰れでも知っていることだった。吉田は中間まで行っておもむろに用をたそうとした。その時にすぐ隣りにあとをつ

ける様にして三十才位のハンサムな男が吉田と並んで用をたそうとしていた。ちらっと好奇心で吉田は左側の今来た青年の方を見た。それは半ばエレクトした。そしてなかなか見事な一物だった。然もそれを吉田にこれ見よかしに誇示する様な態度だった。

吉田は自分の好みのタイプの青年で然も現物の立派なものを見せられて一しゅんあ然として立っていた。やがてその青年も吉田に半ばウインクする様な素振りでそこを出ようとしていた。吉田は唯だとりつかれた様に彼の後を追っていた。青年は気さくに声をかけた。

「おじさん何処かでコーヒでものまない」

吉田は渡りに舟とばかりに

「えゝ何処かえ行きませうか？」

吉田はもう会社の事など忘れたかの様に早く二人だけになり度いと思った。

「どこか近くにいゝところがあるの？」

と青年も又吉田と同じく早く二人で：：：と言った表情を見せた。突差に吉田は決心した。えゝまゝよ朝からでもホテルえ行かうと決め込んで

「朝ぱらだけれ共、旅行者をよそほって行きませう」

と言って青年をうながして二人で駅裏にある一軒の連れ込みホテルえ歩いて行った。

流石の年の甲だけあって吉田はこんなホテルえ朝早くからでも平気で全々恥じらいも見せずに這入って行った。部屋の鍵をかけるなり青年は上衣からズボンへと衣服を脱いでいった。吉田も同じく手早やに丸裸になった。二人の裸がからみ合って呼吸も次第に乱れていった。唯に無言で猛烈な互いのテクニクスはつゞいた。特に吉田の手遠手管には相手の青年も完全に泣かされてしまった：：：：そしてやうやく終りを告げるまでにはがれこれ二十分余りもかゝった。

二人は満たされた気持ちでしばらく動こうともしなかった。漸く気分が落着した頃に吉田は思はず

「あゝしまった会社だ」

と一人言の様に言った。そして残念そうに

「もっとゆっくりしたいんだけれ共、今朝会社でどうしても会はなければならない来客があるので」

と言った。その時に青年は

「じゃいいですよ。お金を置いていって頂戴」

としやしやと言ってのけた。吉田は今迄純情そうにこゝまでつき合って来た青年が急に態度を変えた様な今の言葉に一しゅんどきりとした。そしてすぐに

「一体どれだけ欲しいの」
と聞いた。即座に青年は
「普通は一枚だけれど五千円にまけとくわ」
としやしやと言い切った。吉田びっくりした。
「五千円てそんな大金はないよ。こゝの部屋代も払わんならんしなあ」
「どれだけあるのよ」
「僕は全部で二千円余りしか持っていないよ」
「なんだそれだけしか持っていないのだったらいゝわよその持っているだけお出しそして残りは又あとで頂くとするよ」
吉田は心の中でえらい奴にひっかゝったものだ。こんな奴にさからったらどんな事を言い出すかも知れないと思ったので仕方なく持っている金の中より二百円を残して残り二千四百円をその青年に渡した。
「じゃ明日午前八時に必ずあの便所の入口に来てね、そして残り参千五百円を下さいよ」
と言った。青年の言葉を耳に残して後も振りむかずに、その場を逃げ去る様に走っていった。あゝやれやれひどい男に会ったものだと地下鉄に乗って今朝の八時から今までの間の事を思い返していた。どうだろうか明日あとの金を持って行かなくても良いだろうか？でもこれから毎日々々あの辺であの青年が自分の来るのを待っているとしたらこれも又大変なことになる。だったらあと参千五百円也を支払ってそしてあとくされのない様にして置いた方がいいのではないだらうか。いやまてよ、でもあの男まだそれ以上に金を要求して来るかも判らない。でもそれにしても自分の住所も会社の処も聞いていないのだから真から悪人でもないのかも知れない。いやそれともあの時は二人があれだけ夢中になって楽しんだのだからひょっとすると彼もまだそれには未練があるのかも知れない。こんなことを色々と考え乍ら吉田は定時より二時間余りも遅れて会社に出た。年輩の割に上役にはなっていないが永い間下積みでこつこつと勤めて来た実蹟がある為に会社で上役に叱られると言った事もなかったが吉田は今朝からの事が頭にこびりついて気分は晴れなかった。そして明日彼に金を渡すにしても急に内密で必要になった金のことゝてその金策も今日中に考えて置かねばならずこんなことで仕事も一向に手につかなかった。

　同僚が吉田の態度を見てどうかしたのかと心配して聞いて呉れても吉田はどうしてもこの事は口には出せなか

った。気分の重い一日はとうとう無策のまゝに過ぎてしまった。そして平日と同じ様に何事もなかった振りをして家にかえった。

明くる日に吉田は社用があると妻に言って何時もより半時間も早く家を出た。そしていつものコースを半時間早く廻って会社の近くまで行かうと考えていた。計画は無難に進んで何時もの如く平然として会の机に向っていた。

丁度十時頃だった、会社の受付嬢よりの社内電話で玄関に来客のあることを知らせて来た。吉田にはその名前に心当りはなかったが一応出て見ることにした。

「こちら様です」

と言われて受付嬢の指した方向を見たらびっくり昨日の青年がにっこりともせずにこわい顔をして、そこの長椅子に座っていた。しまったと吉田の顔色は急に青ざめて来た。

青年は言語にやゝさびを気かせて、

「おやじさん、こゝで話そうか?」

と頭から開き直って来た。吉田はおどおどして、

「すまんすまん今日は急に会社で早朝から用事が出来て持っていけなかったんだ。すまんすまん」

と平あやまりした。つゞけて

「こゝでは話せないから一寸そこの喫茶店まで行こう」

と、吉田は外え連れ出す様にと気を配った。

喫茶店で二人が向い合って座ったもののゝ昨日の様なやり取りに○がなどみじんもなかった。

青年の言うまゝに吉田は改めて車代を含めて五千円を支払うことにした。一応吉田一人が会社に引き返して経理より前借りの形式で金五千円也を受取ってその青年に渡した。

青年はにっこり笑ってそれを受取るや

「会社も判ったことだし、又時につき合うぜ」

とすてぜりふの様な言葉を残して立ち去っていった。

東京　二七二〇番

横浜の港が一目で見わたせることが売り物の、この高級サパークラブでも、かなり酒のまわった客のざわめきがうるさかった。

今後の最後のスローな曲を弾き終え、ピアノのキイから目をあげた昭治は、自分をじっと見つめていた青年があわてて目をそらすのを見た。たくましくかっ色に日焼けしたブルーのひとみの青年が、奥のテーブルに一人ですわっている。「ベトナムからの帰休兵だな。」客のまばらな拍手に頭を下げながら、昭治はそう思った。

☆

「よかったら、酒をつきあってくれないかな。」

コートのえりをたてて、帰りかけた昭治に声をかけたのは、さっきの青年だった。

「ぼくはジョージ、きみが、ベトナムで別れた友だちにそっくりなんだよ。」

じっと見つめてくる青年の美しい横顔を見かえして、「ふん、ありきたりなせりふで……。」と思いながら昭治も、この美しいジョージとなら、一夜をすごしてみてもいいな、と考えていた。

☆

ジョージの使うバスの音をききながら、昭治はひとりでブランデーをなめていた。横浜でも一、二のこのホテルのムードはわるくない。ただ、どうも気がかりだったのは、このホテルのバーでグラスをかさねるごとにしずみこんでいったジョージのようすだった。しかし、ハミングをしながらバスからでてきたジョージは、すっかり陽気なヤンキーになっていた。

「やあ、昭治！」

バスタオルを腰にまいただけのジョージは、ギリシアの彫刻を見るようだった。厚い胸の金色の胸毛は、くびれた胴へとつづき、むだなくはりついたかっ色の筋肉は、赤味をおびていきづいていた。

少し背伸びして唇を合わせると、あたたかい舌が昭治の歯をわけて口の中にはいってくる。つよく、やわらかく含を、舌を愛撫する。その長い口付けだけで、もうすっかり官能の火をつけられた昭治は、さからう力も失なって、ブリーフまでもぬがされ、ほの白くはりつめた丸い双丘を見せてベッドにうつぶせる。

バスタオルをとりのぞかれたジョージの肉柱は、その美しい裸身にふさわしい、力感にみちたたくましいものだった。

その先走りの液にぬれたたくましい肉柱が、おしひろげられた昭治の双丘の間にゆるゆると侵入してくる。裸の背に、ジョージの熱い胸がかさなり、ゆるやかなうねりとともに、耳から首すじへ、ぞっとするほどの快感の口付け。おもわず体をかたくすると、ジョージも肉柱をしめつけられで、いよいよせわしく、激しいうねりとなって昭治の体のしんをつきあげる。

横ざまになり、なおも激しく腰をつかいながら、ジョージの手は、おやりたち鈴口をぬらしてあえいでいる昭治の男をまさぐる。ぬらりぬらりと責めたてる手のうごきに、「ううっ。」と声をかみころして快楽の高みに駆けあがる昭治。さらに双丘をかたくとじる昭治に肉柱をしめつけられ、ジョージも又、最後の一突きもなかばに全身をふるわせて体液を放出しつくしていた。

☆

バスを使い、全裸のままねそべってタバコをすっていた昭治がふと気づくと、ジョージは嗚咽をころして泣いていた。

「ビン……ゆるしてくれ、ビン！」

むせびながらジョージは、たくましい四肢で息がつけぬほど強く昭治を抱きしめてきた。ぶあつい胸板に頬をおしつけられながら昭治は、子どもをあやすようにそのバラ色の乳首を唇でもてあそび、ジョージの話をききだしていったのだ。

☆

「ぼくの故郷はテキサス。州立大学の学生だった。召集され、やがてベトナムさ。二カ月めにぼくたちの部隊は、ある村のキャンプに移動した。そこで、ぼくは、昭治、きみにそっくりな少年ビンとしりあったのだ。ビンは、キャンプの食堂のゴミをすてるのが仕事で、いつも裸同然のなりをして働いていた。

じつにしなやかな魅惑的な肢体だった。ぼくはビンにちかづき、休みの日に近くの川へつりの案内をしてもらったのさ。暑い昼下り、つりにもあきて、ぼくは素っ裸になって泳いだ。ビンのやつもボロ服をぬいで、はえはじめた恥毛を必死になってかくしながら水にはいってきた。

水の中で熱く欲情していたぼくは、とまどうビンを抱いた。かじわしい唇を吸い、獣のようにいどんでビンの命の水までも吸いとってやったのだ。

それからぼくとビンは、川辺のビンの小屋で逢い引きをかさねた。しかしビンのやつは、ベトコンの手先だった。ぼくから情報をさぐりだし、ベトコンに通報していたんだ。ぼくがそれに気づいたのは、三か月もたってからだ。味方の行動がベトコンにつつぬけになっており、そのための損害は莫大だった。

そして、ある日、まえぶれもなく訪ねたビンの小屋で交情しているビンとベトコン兵士を見たんだ。ぼくが物蔭からのぞいているともしらず、ビンは、真っ黒に日焼けした顔とさわやかな白い歯並びのたくましい青年兵士に抱かれ、ぼくとのときにはけっして見せなかった狂ったような肢態を見せていたんだ。

おどりこんだぼくは、ビンをなぐって気絶させ、ベトコンの青年に銃をつきつけた。素っ裸のその兵士のしなやかな体に、ぼくは縄をかけた。両手両足をひろげられるだけひろげさせ、壁に大の字型にしぼりつけたんだ。そして、その裸の兵士の眼前でビンを犯した。何度も何度も、あらゆる肢態で。

たましいを失なったように、ビンが又、失心したあとぼくは、苦しげに体をよじり、いつのまにかたくましく天を突いている兵士の体にとりすがった。やわらかく唇に含み、兵士の苦〇の表情をたのしみつつ手荒くしごきたて、いくたびも頂上につきあげ、その男をすすりつづけた。

そして、快楽のきわみで気を失なったビンと兵士の肉の柱を、ぼくは、ナイフで切りとったんだ。二人は死んだ。そのうえ、キャンプでは、ぼくのねじまげられた報告をろくにしらべもせず、その村の女も男も、赤ん坊も老人もみなベトコンだということでぎゃく殺した。それを指揮した中尉は、いま軍法会議にかけられているが、ぼくはその後、部隊がかわり、一年ぶりの休暇で日本へ遊びにきたんだ。だけどぼくも、明日には、又、ベトナムの戦場へもどる……。」

☆

話をきり、全裸のままベッドからおりたジョージは、服のかくしから、ハトロンの小さいつつみをだした。中には、かわいた男の象徴が二つはいっていた。まだ少年のにおいのするおさないものと、たくましい青年のものと。

「ベトナムへもどったら、ぼくは、これをあの村へうめてくる。この戦争がなかったら、ぼくとビンは愛しあわなかったかもしれないが、殺しあうこともなかったろ

う。又、たとえめぐりあったにしても、きみ、昭治君とのような自由な愛の時をすごすことができたろう。それが　ほんのゆきずりの愛にしても……。」

昭治は思った。明日、ベトナムへもどったら、ジョージはもう帰ってこないかもしれない。

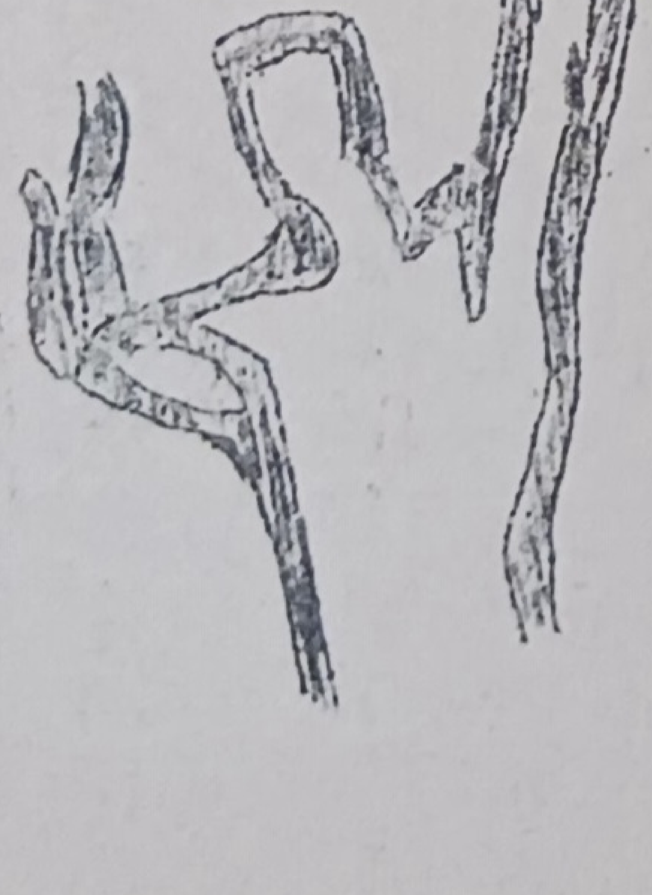
だが、その思いをうちけすように、昭治は、又、ジョージのたくましい体にすがりついていくのだった。

× × × ×

一つの事でもそれぞれ考え方が違う

毛利

昨年四月に当会の事が週刊文春に掲載されました。余り好感の持てる記事ではありませんでしたが週刊紙を読みつけている方でしたら、この程度の書き方なら悪い会ではなさそうだと考えられたのが知らないが当時三ケ月間程は可成り入会者もありました。つまり大変宣伝になったと喜んでいたのですが其後古い会員の方よりの通信が一時杜絶えてしまいました。後で数名の方より告白を受けたのですがあゝして週刊文春に会の名称や毛利晴一と堂々と主催者の名前が写真入りで書き立てられると当地の様な狭い田舎町では毛利晴一と言う名で通信を受けると自分の秘密がばれる恐れがあると思って通信を杜絶していたと言って来られました。こんな考えをされるのも無理はないかも知れませんが世の中の事をそこまで狭く考えて生活していかねばならぬものでせうか。私の考えでは第一に普通の人であればあの週刊紙を買っても余程の暇人でない限りあんな記事は余り興味を持って読まないと思うし若し読んだとしても右から左えと流し読み程度でいちいち名称や個人名まで覚えているものでせうか。若しそんな事に関心を持って名前までメモして置く様な人は同好者以外にはおそらくないと思います。案外自分が気にする程に他人は自分の事など注意深く見ていないものだと私は思っております。こうして一つの記事でもそれぞれとらえ方が違うのですから、これも同好者の特異性ではないでせうか？



正しい常識と円満で平和的な人間になってほしい

毛　利　生

最近の人の物の考え方がすべて自己本位の自分の都合の良い様に自己流に理由をつけて争っているので妥協や解決の方法を見出せず益々世の中がそうぞうしくなって来るのは全く困ったものです。何んとかもっと静かでお互いに善意に満ちた人達ばかりの楽しい輪快な世の中にはならんものかとしみじみ考えたりしているが一向にいゝ知恵も生れて来ないけれ共、私が考えるのに次の点だけは絶対に改める可きだと思う。その一つには労働組合と政治活動で、これは勿論してはいけないと言う訳ではないが会社と賃金や労働時間其他の面で交渉するのはこれはいいとして沖縄問題や安保反対などゝ会社には全然関係のない問題を会社の労組の名に依って対外内的に行うことはどうかと思う。これは時としては会社の営業成績に大変なマイナスになると思う時さえある。一方では労組が会社に賃上げを要求しておいて他方で会社のマイナスになる様な運動をしていることは私にはどうも納得出来ない。だから政治活動は労組員の中の志を同じくす同志が集って別の名称で会社を離れてやればいいと思う。つまり労組は労働問題に限って活躍し政治活動は別にすべきであると思う。

次に創価学会と公明党の関係であるがこれは私の認識不足であるかも知れぬが宗教法人である学会が一つの政党になっていることが納得出来ない、宗教と言うものは信仰するものであるから政党よりももう一段高いところにあるものであらねばならぬと思う。だから他の宗教の様にどの政党に属している者でも同じ様に信仰してよいと言うものであらねばならぬと思う。だからこれも前者と同じ様に宗教は宗教、政治活動をする政党は政党と別々である可きであって表裏の様になっている事にどうもおかしい。大変に信者も多い様に聞いているがあまり一票を争って代議士を一人でも多くなどゝいう様な事に力を入れずもっともっと布教に力を入れて、そして心掛けの良い人をどんどん作って欲しいものだと私は思ってのります。つまり宗教は政治権力を握って社会を明るくするのではなく信仰の力に依って社会を明るくして欲しいものだと考えるのは私だけでせうか？　次に言い度いことは学園紛争であります。これも学生運動と政治活動は別に切り離してやらなければいけないと思います。学校

に対する不満であれば学校の最高責任者と話し合って解決すればよいのであってそうでなくて学校を根城にして一部の人達が政治活動をやるなんてことは他の関係のない人達に大変な迷惑をかけていることで、そして大きくは国公立の場合など一般国民の税金でまかなわれているのであるから国民を裏切っている訳であります。果ては日本を革命に持ち込もうなってに至っては幾ら大学の総長が誠意をもって話し合っても解決のつく問題ではないと思います。人それぞれに考え方が違うのであるからそう言う思想を持つことも自由であるが他人に迷惑をかけて省り見ず、然も暴力を振ってまで自分達の意を通そうとすることは暴力団や強盗と何等変るところがないと私は思います。今日程思想がまちまちでそして言行不一致の時代は今迄私は知りません。私はこれは人間的価値の低下だと思います。現在の日本は品物はどんどんと大変優秀な品物が生産されていますのに肝心の人間が低下していったのでは困ったものだど私は思います。器人はいつも自分は悪人だと思っておりません。そんなことに気がついていたら既に善人になっている筈です。自分を低下させていることはなかなか自分で自覚出来ないものです。常に日々を反省してお互いの力で少しでも社会の中を明るくする様に努力致しませう。

× × × ×

外国の雑誌に当会の記事

十一月の末に東京の会員でない方から電話を頂きました。確か原田さんとか申されましたが実は過日外遊中にデンマークのコペンバーゲンで発行している雑誌にお宅の会が約六頁にわたって招介されていましたと報を受けました。もっとくわしいお話を承るつもりでしたが先方さんが来客の都合で電話を切られましたので、それ以上は伺えませんでしたが六頁も記事が掲載されるとなると余程本会の事にくわしい人が記事を聞かなければとうてい掲載出来ない事だと思います。尤も以前より色々の国の人が入会して喜んで本会を利用し会の行き方を理解してかえって行った人も何人かおりましたから多分その人達より記事が出たことゝ思います。悪千里を走るとか昔の人は言いましたが現在は尚更に良い事でも悪評でもこうして外国にまでいつの間にやら伝っているものです。でも決して悪い記事ではなかった様ですから安心して下さい。万博を控えて宣伝してくれた様なものです。

心の波止場（連載小説）

東京都　佐　藤　正

藤が、楠田練一から、手紙をもらったのは、秋もすっかり深まった十一月初旬であった。

同好会の雑誌に僕が自分の事を掲載して、その雑誌が発行されて、一週間ぐらい過ぎてからである。

練一はその雑誌を読むと、早速手紙を回送し、その文面には、こちらから、出向くのが本当であるけれど、自分は、マンション住いである。誰に遠慮気兼もいらない故どうか、こちらに　暇を見て来てくれと云う文面だった。

王子　西ケ原に彼のマンションはあった。僕は、その翌日出向いた。白亜の　ドーム風な感じのする、やはらかい感じのその建物であった。

「よく　いらっしゃいました。どうぞー」

僕が、その部屋の前に立って扉をノックすると、すぐ扉が開いて　練一が顔を出した。

僕　佐伯です。御手紙を　もらったのでー」

僕は、廊下に立って　そんな挨拶をした。

部屋に入ると、二間続きになっていて、奥の部屋にベットが、設けられてあるが、つよく、僕の服を促らいた。

豪華な、椅子に就くと、練一は、すぐ　茶菓子の用意をするのだった。そして、彼は、僕の服をじっと見つめて

「僕は精神的に　相手を好きになれないと交際を願おうという気になれないんですー」

「つまり、相手が　自分の　好みの型でないと、駄目だって云うんですか？」

「いゝえ、そんな、自分の好みの型で、ホモの人なんか滅多にいませんねえ、だから、相手の教養　学内　それらを身につけた　ゆかしい人柄、僕はそんな人を求めています。顔や姿は二の次ですー」

僕は　黙ってしまった。僕は、果たして、この練一青年に、好きになられるのかな？」と思ったからだ。

（まあ、いいや　好きになって　もらいなくても、その時は　其の時さー」

僕は　出された茶を飲み乍ら　改めて部屋の中を見回した。晩鐘の額が、懸っている。

ゴッホの油絵も　かゝっている。床には　みどりのじゅうたんが、一杯に述べられて足許から、温気が　測々と上ってくるようであった。

練一が　云った。
「僕は、相手を　好きになっても、。だんだんに相手の肉体をも　愛さうと　するのです。いきなり　初対面から何もかも愛そうとすると　すぐ〇きて　しまって　却ってまづいのですー」
「僕と　同じような考えを　練一君は　考えているんですねえ。僕も、相手を好きになれないと、どうしても、その気になれないー」
練一が　何のためらいも見せず云った。
「僕は　最心から　佐伯さんを　好きになりました。第一印象で、とても　素適な方だと思いました。僕と交際して下さいー」
僕は　相手から　思はぬ　好意ある　求愛を受けたのである。
「僕は　練一君から　好きになってもらえるか　どうか　不安に思ってましたよ。でも、好きになってもらって　ありがとうー」
と　云ったが　僕は　どちらでもよかったのである。相手が　こちらを　嫌いなのを　喰い下って　こちらを好きになってくれとか。
今後も　何時迄も交際してくれとか　そんな事を　頼みこむのは、僕は　嫌いであった。
椅子を起ち乍ら　練一の笑顔と　やはらかい声とが、僕の方に　飛んできた。
「ねえ　佐伯さん　フォートを見せましょうか。僕はねえアルバムに貼って　沢山　持っているんです」
彼は　そう云って　本箱の蔭から　部厚い　金色に光る紫色の平打の紐で綴ったアルバムを取出してきて、僕の前に開いて見せた。其処には　四十枚位の、男性フォートが　ぎっしりと貼りつけてあり、一服見て情欲を　そしられるような　フォートの　羅列であった。

つゞく

尚次の文章を会員番号でのせて下さい。
東京には　貴会のような機関がないので残念に思います。折があったら来阪致したく思います。その時はよろしくお願い致します。

二五九三

学生のアルバイトでも日給千五百円位いはもらえると言った時代に僅か月給参百円の会費が確実に納められらい様では到底いい交際相手を求めようとしても無理な話です。先づその性格から改めるべきでせう。

× × × ×

交際申込みを受けて落か否かはそれぞれの好みなり都合があって致し方がない事だが否の場合でも丁寧に一言を添えてお断りするのか美徳の持主と言うもの

× × × ×

父親を求める青少年に交際する年輩者は常に毅然とした頼もしい父親であらねばならず、兄を求める若い人に接する年長者は常に教養服装其他の面で頼りになる人でなければ永続しない。そしてその中に愛情が自然と生れて来るものである。

一言メモ

他人に誠実を求める前に自分が誠実であるかどうかを反省せよ

相手に住所や職業を聞く前に自分のそれ等を話せ

一時的な甘言はチクロと同じで害になるが無言の誠意はお互いに明るく健康にする

見栄を張った無駄使いは長続きはしない、つゝましく誠実な交際は却って親密の度を増すものである

好きな相手にはなる可く負担をかけ度くないのが人情、派手に浪費さす人は好きでない証拠である

簡単にほれるより他人よりほれられる人間になることが大切である。然し道は遠い

連載

生いたち（三）

横浜市　青山生

僕は大阪に寄つて本社に行つて見た。焼野原の中で本社の大きなビルは元のままであつたが、船の大部分が沈められた今、営業らしい営業はやつていなかつた。友人の処に宿めて貰つて二、三日通つて見たが、勤めをつづける場所、下宿先が見当らなかつた。あつたとしても月給を上廻る下宿料であつた。

大阪は闇が横行して、七百五十円の月給じや身寄のない大阪では餓死する外はなかつた。すぐ大阪を立つた。

国に帰つて見ると母は一年前に死んでいた。僕の名儀で預金してあつた。銀行預金と郵便貯金は三万円あつたが封鎖で使用できないし、戦前の一財産は無価値なものになつていたのです。

僕は景気のよい建築会社に勤め始めた。

〇〇商船からは毎月給料が送つてきた。兄の家に居候しながら再起にそなえて両方の金を貯金し始めた。

義姉の勧めで見合をしたが、結局断りました。

一カ月の才月が経つていました。元〇〇商船の先輩で、俳句仲間松田氏が上京してこいという手紙を寄こしてきました。

仲間が働いている処が、人を必要としているというのだつた。翌日切符を買いに行つて、五日後の切符を買つた。

会社が辞めさせないので、そのまま無断に辞めることにして、五日後に国を立つた。満員の汽車に乗つたのです。

「上京するからよろしく」との電報は打つていたのだつたが、東京駅には十一時近くだつたので友人には連絡取れなかつた。一晩の宿を捜がしたが、何故にも見当らなかつた。十一月末で、もう寒く野宿も出来ないので困つていると、駅員が「上野でしたらありますよ」というのだつた。

上野駅について周辺を捜がし歩いたが、やはり何処も「満員です」と断わられました。途方に暮れながらも真夜中を捜し廻つたのです。トランクは重くなつて足も痛かつた。

或る一軒の旅館を断わられて、重い足取りで出てくると四十才位の和服の男が近づいてきて「宿るところならありますよ、家にきませんか？」といいました。

そういえば一寸前から後から歩いてきていたようです。

僕は地獄に仏とはこの事だと思い、

「御願いします。何軒行つても断わられどうしようかと思つた処です。ほんとうに助かります。」と僕はその時は感謝をこめて礼をいつたのです。

歩いて二十分位の処でした。店は看板になつていたが、小料理か寿司屋みたいな普請であつた。入口を開けると鍵をかけて、二階の一部屋に案内した。途中二階から女中みたいな女が下りてきて「あら！　お客さんね！」といつて引返し部屋に蒲団を敷いて出て行つてしまいました。

僕がトランクを床間において手持無沙汰でぼんやりしていると、

「さあ、一緒にお風呂に入りましようよ」というのでした。色は白いがズングリとしていて品のない顔をしていて、好きになれない男だつた。ヒゲ削の後が青いが、顔の大きい、猪首だつた。

その時、この男は世にいうオカマじやないかしらんと思い気持が悪くなつてきました。

「疲れているので、このまま寝かせて下さい」

といつた。汽車に一昼夜も乗つていて汚れているので、真実は入りたかつたが、こんな男の前に裸をさらす気になれなかつたのです。僕は精神的にも肉体的にも尊敬できなければ好きになれないのです。

もう二時になつていました。トランクを開けて寝巻を出すのもめんどう臭いので、下着だけになつて蒲団の中に入つた。疲れているのでウトウトしていると、さつきの男が蒲団の中にもぐりこんできました。電灯がつけ放しになつていました。

僕の局所に彼の手がきて僕の陰茎をギユッと振りました。僕は吃驚して、その手を払い彼に背を向けました。

「いいでしよう。一寸でいいから触らせて！」と強引に再び僕の男根を握りました。

僕は後向きのまま身を固くして、そのままにさせました。

「泊めてもらつているのだから、我慢しなければ」と自分にいい聞かせました。外は木枯が吹いているのだし、此処を逃げ出して野宿する訳にもいかないのです。

「こちらを向きなさいよ！」といつて僕を仰向けにさせると僕の男根を愛撫し始めました。

僕の下腹部はむき出しになつたままなので少し寒かつた。

僕は目を閉じたまま、観念していました。

彼は静かに僕のを上下動させていたが、「いい格好をしているね、これで、今まで何人女を泣かせて来たの」といつて、僕の上にかぶさつてきました。暖かいヌルーと

としたものが、僕の亀頭を包み込んだ様でした。見ると彼は僕のを口に入れていました。

いやだ、不潔だと思いながらも、僕の意志に反して僕の男根は、屹立していつていました。

彼は僕の身をすりよせて僕の手を取つて彼の固くなつたものを握らせました。

「〇〇〇〇かいて……早く手を動かして上下に根本の処まで！」

というので、僕は目をつぶつたままいわれた通り動かしました。こんなことは早くすませなければ、一晩中こんなことをさせられてはかなわないと思つたのです。彼は身体まで動かしていました。僕がお義理でやつているのが彼には不満なのか僕の男根を口から外すと「ここの処を指先でこうするのよ！」といつて指先を動かして僕の亀〇のふちを軽く愛撫しはじめました。僕は目をつぶつたままいわれた通り義務的に繰返していました。彼は僕のを激しく愛撫し口から入れたり出したりして根本をきつくしごきましたので、僕はとうとう射精してしまつたのです。後味が悪かつた。漠落たる思いであつた。

彼は不満足なのか尚も僕を求めてきましたが、僕は後向になつて固く拒否しました。

二、三回求めを無言のまま断わるとあきらめたのか、後はそれ以上求めてきませんでした。

僕はうとうとしただけで東の方が白み初めると、僕は待ち兼ねるようにしてその家を脱出しました。

その日友人に会つて、或る小さな会社に就職できたが、東京都に転入できないので、下宿を転々とした。時には会社の机の上に寝た事もあつたのです。貯金を少なくなつていました。

その頃故郷から転送してきた手紙には〇〇商船の退職の通知と退職金が入つていた。子会社S運輸への就職あつ旋状も入つていた。僕はこれに従う事にしました。

駐留軍の下請の仕事をしていて、英語を使える者が欲しいということであつたのです。

米軍では英語が出来るということで顧問待遇にしてくれた。給料は両方から貰えるので、従来の五倍位の収入になり闇米の生活でも余猶が出来る様になりました。油絵を本格的にやり始めました。一水会には連続して入選するようになり自信をもつて日展にも出品して入選した。日曜画家でもやればやれると自信をもちました。

その頃戦前戦争中を通じて友人の一人であつた親父の様な年の人山村氏〇〇〇〇丸の司厨長の世話で結婚問題が

始まつていました。清純な処女であつたので結婚して見ようと思つていたのです。或る日所要で横浜に出た帰り桜木町から渋谷行に乗つた。

「やあ久しぶりだね。此処におかけなさい」という声がした。加藤氏だつた。南方に居た時、同会社に勤務したが勤務場所が離れていた関係で顔見知りではあつたが、あまり親密ではなかつたのです。南方時代宮地氏と連れ立つて軍政監部に来たのを僕は見ていました。

なつかしそうに立上つて僕の手を取つて隣に座らせたがその手をなかなか離してくれず、そのまま自分の膝の上に載せたままにしていました。

僕も友人とビールを飲んでいたので赤い顔をしていましたが、そのままにしていました。加藤氏は先輩ではあつたが、メツペリとした女性的な顔はあまり好きではなかつたのです。

宮地氏の消息が分るのじやないかと僕は彼のじよう舌を黙つて聞いていました。こちらから聞くのは何となく後めたい思いでした。この人もホモかもしれない。宮地氏とのグループに関係があるのじやないかと思つて期待を持つていました。その時前に座つていた口ひげの紳士が立上つて僕等の席の前にきて加藤氏に「ヤー」といつたのです。

親しい様子だつたが酔つているらしく赤い顔をしていました。「いい稚児さんだね！」と加藤氏にいつたかと思うと震動によろける様にして、僕に覆いかぶさり僕の顔を両手で抱えベトベトした舌か唇で顔中を押しつけたが力強かつたし、息苦しい程はげしく口の中にもおしわる様にしてやわらかいものを押込んできました。

「妙連寺、妙連寺」

と駅員の声が聞こえた。電車がとまりドアが開く音がし乗客が降り始める気配がした。瞬間僕は暴力的な圧力から急に解放され、彼は疾風の如く乗客にまぎれて降りて行きました。

「ああ汚ない。あの爺さん何ということをするのだろう」

僕はポケットからハンカチを出して顔を拭き、口を拭いた。さも不快そうな顔をしたのだが、乗客に対する照れ臭さをカモフラージュするゼスチャーであつた。ちつとも不快ではなかつた。乗客の視線が皆、僕の方を向いている様で恥かしかつた。肥つていたが顔のあまり大きくない童顔の僕の好きなタイプだつたからであり、身なりも清潔そうであつたのです。

しかし三十過ぎにもなつた男をつかまえて、稚児さんと

は、苦笑したが、僕は元々若い時から若く見られていた。特に酒を飲んで赤い顔をしていると、その頃でも、七、八才は若く見られていたのです。現在も十才若く見られています。

加藤氏は何事もなかつた様に能面の様な顔をしていた。今の男を知つているのに知らぬ顔をしているに違いなかつた。あれだけじようぜつだつたのに、彼は口数少なくなつていた。僕は次の駅で下りてしまいました。五年も前の宮地氏のことを期待すること自体馬鹿馬鹿しいと思い直しました。

二月に結婚しました。妻は処女だつたので、僕のいいなりになり、僕も自信をもつて結婚生活が出来ました。新婚旅行も箱根、伊豆と宿り歩きました。

性交渉も毎日一回から二回できました。半年頃からは週三回ぐらいに落ち着きましたが、幸福に生活はバラ色に満ちておりました。同性愛のことは忘れていました。

十二月に長女が生れましじれ。翌々年の一月に次女が生れました。

生活は楽でしたし、日曜画家でしたが、一水会には連続入選していたじ、日展に出品すると入選し、画家で立とうかと考えていた時代でした。

勤めの関係上、招待が多かつたので酒が強くなかつたが宴会などに出る機会が多かつたが、あまり好きではなく早く帰る様にしていました。或る時は芸者が追いかけてきてヤクのに困る様な出来事も二、三回ありましたが、大概、平穏無事な生活がつづいていました。好事魔多しというが、昭三十五年僕は肋膜炎になり高熱が続きました。会社も悪くなりましたし、駐留軍の方も引揚げて行きました。僕は会社を辞めました。

小康を得るようになつて持家と土地を売つた金と、退職金で東京で茶店を開業することにしました。

画で生活するには絵を売つて歩くのに精力の大半を裂かなければ生活できない事を知つていたので、その方を選んだのです。しかし事業はあまり調子よく行つていませんでした。

妻は又子供を孕んで居ました。妻は泣きました。僕の陰茎も睾丸も人並に大きいとは思えませんでした。海軍中佐、薬屋のおじさん、萩原氏、宮地氏、大人のは皆大きかつたのに、又、自分は不具者だと思つていたのに子供は次々と生れてくるのに不思議と思う反面、うれしい思をしていました。が、又困つてしまいました。

妻は中絶致しました。

昭和三十八年東京の店をたたみました。三百万円の金を捨てたと同様な結果になつて横浜に帰つてきて、小さな店を始めました。細々と生活しながら、再就職することにしましたが、中年になつてしまつた今、中小企業の外基盤のしつかりした会社は受入れてくれない事は確実であつた。

昭和四十一年、経理課長として（食堂、パチンコ、カクテルコーナー、キャバレー等を兼業する）会社に入りました。

その頃より学校の同窓会には招待状が来ても出席しない様になりました。大低の者は会社の重役、経営者、一流会社の支店長、部長という者が多く、劣等感を味うだけだと分つていたのだからです。親子四人、貸間を転々としていたが、住宅公団の分譲住宅に当選して、やや生活が安定しました。

妻は中絶以来妊娠恐怖性になり、僕にサックさせなければ夫婦生活をしなくなつていました。身体が悪くなつてから月二回ぐらいのペースに落ちていましたが、月に四回ぐらいまでに回腹していました。

貸間を転々とする様になつて以来、子供も大きくなつて夫婦生活も自然少なくなつていました。

結婚十五年もたつと刺激がないとあまり興奮しなくなつていましたが、（3DKの）個立した部屋があることは自分達だけの性生活が楽しめる様になり、僕の身体も丈夫になりましたので、新鮮な気持が復活してきていました。夜寝る前必ず風呂に入り、ビールを飲みました。サックだけでは刺激がなくなつているので、前戯を長くする様にしました。酒の勢で全裸を妻の前にさらし、僕の息子をフエラチオさせる様にしました。

妻は永井荷風が、女の人達にフエラチオさせていたという記事を（婦人雑誌）読んでいたので、興奮していましたので、喜こんで僕の息子を愛撫してくれました。（僕は興奮してそのまま射精することもありましたが、）思わず叫び声をあげてしまうのです。

妻はその時サックを僕の男根にかぶせて、口で濡らしてくれてから行為を行なう様になりました。

性行為の時間は段々長くなつて行きました。その頃僕は上品な年配の自分の父親の様な人がいると他の人が美人を見る様にそういう人を眺める習慣があります。

そういう人がプラットホームにたつていると思わずその人の後から乗つて行くことが度々あります。

そういう人と満員電車の中で身体が触れ合う時、父親ら

しい匂を満潔できるからです。
僕は夫婦生活を長くやりながら、でも公団住宅に住む様になつて、又、満員電車で通う様になつてから、こういう楽しみをもつようになりました。
しかし、この頃は生活が楽になつた為か、自分の好みの人達の多くの年配の人達は一等客になつてしまつた様でなかなかそういう機会も少なくなつた様です。しかし、チャンスはありました。
或る日満員電車で帰る時、六十才位の半白の髪が見えましたので、二つドアの満員の入口に後を追つて乗込みました。
一旦姿を見失つたのですが後ろから押されている内に、すぐ前の前に押されながら立つていました。
目が涼しく、口ひげも白くなつていましたが、血色がよく、肌がつやつやとしていました。昔は美男子といわれたような人でした。僕の半身が彼の身体の正面に倒れそうな格好になつていましたので、体勢を整えながら彼の前に脊けるようにしました。彼は僕より二、三寸高い様でしたが、煙草臭い男親の強い匂の息が僕の耳にかかつていました。父親に抱かれている様な快感でした。子供の時中佐に抱れていた時と同じ感覚でした。

僕は震動に合せて壁面に立つ彼を押しつけました。つき出した僕の尻部に彼の暖かい部分が感ぜられ、僕は興奮しました。
不自然にならない様に注意しながら押しつけていると気のせいか、そこは益々熱くなつて、物体の存在が分るように固くなつて行くようでした。
僕の口中は枯り、僕の股間は固く濡つぽくなりました。身動きできないような彼と僕の尻の間に彼の手がすべりこんできて、突張つたものの位置を変えている様な気配がありました。
彼の手が引込むと、しばらく様子を見てから自分の尻で彼の男根を捜しました。
あつい棒はすぐ見つかりました。僕の尻を右側に移動させると尻の割目に当りました。背伸びする様に、僕は震動に合せて上下に動かしつづけました。
僕は陶然として、このまま何時間もこのまま続ければよいと思いました。
二十分の時間はすぐ去つて電車は止つた。下りる人が少なかつたのであまり突かなかつた。（次の停留所）まで八分であつた。
エクスタシーで倒れそうな気持になつていました。

不自然にならぬ様、そのままの姿勢をつづけた。電車が止つた。大勢の人が下り始めた。彼は僕を押しのける様にして降りて行つた。僕は彼の顔を見なかつた。彼はホモではなかつたのだ。恥かしかつたのです。倒錯の性が生んだ想像の恋、空しい不毛の空中楼閣にすぎなかつたのだ。

しかし帰るとその日の夫婦生活は激しかつたのです。しかし反対に同様なことを僕より背の高い高校生に挑まれたことがあつた。僕がその習慣があつたので、その高校生の異状な行為は、僕にはすぐ分つたのです。顔を見るとまだ若い生毛が見える。僕は快感はなかつたし、愉快でもなかつたがなすにまかせて前の老紳士の如く降りる時、彼を引離して降りた。彼は赤い顔をしてうるんだ様な目をしていた。立場が違うとこんなものかとあわれでした。やはり或る時生暖かい臭づかいが気についた。尻部に熱い物体をおしつける様な感覚があつた。車体の震動にあわせて動かされているのに気がついた事があつた。僕と同年配の男である。僕の尻の割目に彼の局所の膨みを感じたが、僕は少しも燃えてこなかつた。なんだかあわれで自分がみじめであつた。

こういう事を書いていると欲情ばかりしている様であるが、結婚以来十七年間、世間なみの平穏な生活を過していると見なしてもよいと思う。子供が生れれば共に喜び旅行を親子水入らずで楽しんだり、遊園地や、動物園に行つて家庭団らんをやつてきたつもりです。しかし今年の三月になつて妻の母が死んで国に帰りました。子供達も一緒について行つたので半月間独りになりました。この五、六年間（独り身のさびしさに）映画も見ていなかつたのですが、それが僕の平静な気持を乱すもとになつたのです。

スエーデン映画で濡れた唇という題名でした。

義父に犯された少女が、義父を好きになるが、その義父が目の前で車にひかれて死ぬと、犯人をさがし当てたのですが、その夫の医者が性交をしている処を目撃してその医者が好きになり、その医者の家にすすめに従つて同居する内に犯人にかくれて情交する内に、湖畔の小屋の中で抱きあつているのを見つけられ、小屋共々に焼き殺されてしまうのです。その医者が好きで可愛想であつた。若い男女のラブシーンは僕にとつては只青臭いだけで何等興奮を伴わず、反って不潔感すら覚えるのです。父親の様な男が（但し好みの人物でなければならないのだが、少女を犯したとしても、とがめる様な気持になら

ないし、興奮すら覚えるのです。同情さえします。裸になつたその医者の身体にショックを受けました。二十三年前の宮地氏の身体そつくりだつたのです。ひげがこゆいのに体毛がなく、胸の乳首の処が膨らんで少したるんでいる処がそつくりだつたのです。

涼しい目と口元も憬がありました。

僕は平静でいられなくなりました。興奮してしまいました。家に帰つても興奮は静まりませんでした。

風呂に入つて身体を洗つている内にあの身体を思い出しこの年になつてマスターベーションをしてしまつたのです。僕は異状でしょうか? 病気なのです。又こういうことになつたのです。五十才に手がとどく年になつて恥かしい次第ですが、煙草も止められる意志の強い僕が、悪魔のとりこになつたように、どうすることもできないのです。

僕はこの映画を何日も見ました。それが終ると、その俳優の出演しているのをスチールで知つて恍惚の泉という映画を見ました。それでとうとう忘れていたものに火をつけてしまいました。スエーデンの夏の美しい海辺を背景に若い男女の性交渉を色々と画いたものでした。若い男女の性交渉には興奮しませんでした。その中の挿話の一つとしてあの医者になつた俳優が、中年初老の倦怠期の夫婦として登場していました。

夫婦生活に刺激を求めてボートで若い処女をつれて出かけ、洋上で性生活をするのですが、後姿しか見えないが裸体で海に飛び込む処や、甲板で日光浴しながら男性のシンボルの上に帽子をのせたまま寝そべつているのを少女が帽子をとりあげてみるシーンはショックでした。

勿論シンボルは見えませんでしたが、あの時と同じ様に腰と下腹だけが日焼せずに白く見えていました。その映画も若い男女や中年の婦人のみが美しいといつていた様ですが若い者達には何の感興もありません。あの初老の男性のみが、美しいものとして映るのです。僕は恥かしくも性欲が異状に昂進しました。耐えられずに自慰までしました。妻が帰つてくるとむさぼる様にセックスしました。

妻は僕の異常な昂りにどうして毎日するのか不思議がりますので、長い間禁欲していた為だといいわけしました。

以下次号へ

雑件（お願いや注意）

事務局

一、文通される場合に相手方の住所が手紙の内容に記載されていたら直接に返事を出して下さい。当会を経由する必要はありません。

二、再三注意することですが交際申込みを受けて否（ノー）の場合は○印をつけるだけでなく一言でも文章を記入する位の礼儀を守りましょう。本会会員の良識というものです。

三、余暇があれば出来るだけ近くの人は事務所に遊びに来て下さい。特に土曜日などはなるべく早い目にきて下さい。土曜日は休日又は半ドンの会社が多いはずですのに事務所に来る時間が遅い様ですがもつと早い時間に集まる様に致しましよう。

四、転送の手紙を受取つた人が内容に会員番号も氏名も記入してなくて誰れからきたものか判らないものが最近数通ありましたが、差出した人はもつと良く注意をしてこんな間ぬけた手紙を出さぬ様にして下さい。どうも何事につけてもうつかり屋が多い様です。

五、時々私に（毛利）交際申込みをして下さる方がありますがはなはだ勝手ながら一切お断わり致します。勿論大勢の会員の方の中には私の好みの方もおられますが、私はずつと創立以来十年間余りにわたつて会員の方とはおつきあいした事がありません。そうしなければ所詮人間ですからえこひいきが出来るといけませんから自制してきた訳であります。これは今後も守り通すつもりでありますから今後一切申込まぬ様にお願い致します。

六、再三注意していることですが、手紙の転送を依頼する際に自分の住所を相手に知らすのなら内容の末尾に記入して下さい。封筒の裏に記入したり甚だしいのは相手の会員番号を表に、自己の会員番号を裏面にペン書きしている方がおられます。非常識もはなはだしい。これでは相手に恥をかかす丈で決して良い交際は望めません。そして内容は当会では読みませんので開封で送つて下さい。丁度その会員に知らす可き事項等があつた場合は同封した方が好都合です。でないと同じ宛名の会員に同一差出人で同時に二、三通も封書が着くのは不自然ですから相手の立場を考慮しましよう。

七、二カ月に一回の割合で会誌を出すとなると原稿が足

りませんからどんどん投稿して下さい。長短編何れでも結構です。そして地方の紹介でもできるだけ会誌に掲載して喜ばれる様なものを書いて下さい。

八、会費は前納を建てまえにして下さい。斯る会を運営するのに会費の後払いではとうてい運営の円滑は期し得ませんから必ず協力して下さい。

九、いよいよ万博開催が迫つてきました。来阪予定がつきましたらできるだけ早い目に期日を通知して下さい。そしてそれまでに出来るだけ当地の会員に手紙で呼びかけて置いて下さい。その際決して失礼ではありませんから数名に出して置かれることが安定した相手を得られます。

十、当会の休日は毎週火曜日と第二、四日曜日です。それ以外は午後二時より開放しております。平日は午後八時まで、土、日曜日は午後十時まで開けておりますから、せいぜいお越し下さい。時間ぎりぎりで来られる時は前もつて一寸架電してから来て下さい。

十一、次号会誌は三月下旬に発行の予定ですから御期待下さい。

ラ・ロンド（回旋曲）

大阪市　二、五八三番

一、青春の歓びへのめざめ

東京都内のY高校は、周囲に邸宅が多いため、登校には数々のコースが選べた。僕は当時、古典文学が好きであつたから、僕のムードにあつたコースを、他の大勢の高校生のコースより外して、独り楽しく通学していた。わけても、明るい陽ざしを受けて、とりどりの彩りのバラに囲まれた窓のある、優雅な家の前を通るのが楽しかつた。やわらかく甘い春のそよ風が、そのバラの高い香りをのせて、毎日僕を送迎してくれるようであつた。或る朝、僕は後から僕を追いぬいて行く上級生に気がついた。一メーター八〇もある身長は、既に肉付きもよく、赤銅色のたくましい顔に、日本人には高すぎる鼻が目立ち、双眸も大きく激しく光つているようであつたが、静かな甘い夢を感じさせる柔らかい温かさがあつた。

その高三の上級生と僕は、僅か二つの年令の差であるのに、充分成熟した立派な体くのためか、僕は彼に対して遠い距離を感じていた……が、もし合わない朝などは、

やはり淋しかつた。唯それだけで夏休みも過ぎ、やがて快い秋となつた。学校は都内の公立高校のみの対抗体育祭にそなえて、放課後約一時間程、応援歌の練習を初めた。優雅な感情のない、実用音楽の応援歌は、何も面白くなかつたが、激しい命令口調の団長の傍で、時々補助的に話す副団長が、毎朝あう上級生のTであることを知つた。そして同時にTの性格が、人間的にスケールが大きく、ポインをよくつかんでいることも、応援歌の練習を通じて解つた。

秋の体育祭がすんで間もない頃であつた。僕は学友達と、楽しい修学旅行のプリントを、放課後の職員室で刷つていた。

「お……いF。一寸来てくれ」

突然の呼びかけに、僕は驚ろいてふりかえつた。そこには高三のMが立つていた。彼に従つて廊下に出ると、Mは声をひそめて、僕の耳もとにささやいた。

「副団長のTが、お前に用事があるから来てくれといつてんだよ。Tは校庭の西の裏門に一番近いポプラの木で待つているから、すぐに行つてくれよ」

Tと聞いて僕は胸さわぎを覚えた。毎朝会つていながら、まだ一度も口をききあつたことがない彼。僕は彼が好きなんだとは気付かず、なぜか気になつていたため、Tからの突然の呼出しに狼狽した。僕の様子を見たMは

「おいF……！何も心配することなんかないよ。すぐ行つてくれよ。Tはもう待つているんだから……」

「はい……！直ぐ行きます」

× × ×

つるべ落しの秋の夕陽は、余光もいつしか消え去つて、人気の全くない校庭の砂の上に、秋の冷い夜気が静かに敷きつめていた。期待と不安の交錯した僕のアレグロ・アンダンテの脚は、その砂を踏んで裏門に至つた。夜目にも鮮やかなTの大きなスタイルが、ポプラの木陰から一歩出て僕を招き、再びポプラの影に没した。

「待たせてすみません」

「いいんだよ。僕こそ突然に呼び出してごめんよ」

そしてしばらく雑談をしていたが、突然、僕の前に、Tの成熟した大きな体くが、覆いかぶさるように接近して僕は肩を抱かれた。その瞬間、僕の全身に鋭い電流が走つた。そして当時の僕にはまだなかつた、成熟した男性の甘い脂ぎつた香りが、僕の官能をゆすつた。

「俺は毎朝会つているお前が好きなんだ。とうとう我慢しきれなくなつて呼出したんだ。お前は俺なんか嫌いか」

Tの激しい直情の訴えに、かねてから好意を抱いた僕も、徹底的に圧倒されて、直ちに僕の感情を告げることができず、眼を閉じていた。Tは僕の肩を激しくゆすりながら

「俺は本当にお前が好きなんだ。前から好きだつたのだ」

語尾がいくらか柔らかな表現だつたため、僕は眼を開けた。興奮にはずむTの肩に、僕の顔はぴつたり接していたのだつた。

「Tさん……！　僕だつて誰よりもTさんが好きなんです。でも僕からいうことは、どうしてもできなかつたのです。唯、Tさんだけが……僕はTさんだけが……」

僕のあとの言葉を遮るように、Tの唇が僕の唇に重なつた。僕の体はTのすごい力で抱きしめられ、僕もTの体にとけこまんばかりに抱きついていた。広い校庭は唯二人だけの世界であつた。積重つた落葉の大きなカーペットは、Tと僕だけの、甘く激しい褥と代り、黒い大きな幾本ものポプラの木々が、二人だけの落着いたムードを隔絶していてくれた。

そして燃える肉体と肉体の結合に、晩秋の宵の冷気などは感ぜられなかつた。Tの太く力強いたくましい双脚は、上部にも固い体毛が茂り、林の中に直立した巨砲は黒く、しかもすばらしいスタイルであつた。そして僕の両掌にては包みきれない砲身のその先に、巨砲の頭が力強く威容を示していた。僕の頭はいつしかTのたくましい双脚の間に入り、巨砲の先は僕の口腔にあつた。やがてTも僕と同じポーズとなり、二人は最高潮に向つて秋を刻んでいた。若かつた二人の砲弾は、期せずして殆ど同時に発砲された。全く奇せき的に……同時に……せきを切つて流れこんだ多量の青春の泉は、互いの体内深く生命を宿したのであつた。

肩をならべて静かに歩む二人の頭上に、Tの瞳のようにすみきつた美しい金星が輝いていた。Tに夕食をごちそうになつて別れる時、僕はいつた。

「Tさん。今日は本当に有難うございました。」

「おい……！　よせやい……！　Tさんなんて……　俺達は完全な兄弟じやないか。俺を淋しがらせるなよ。兄貴つて呼んでくれよ。これからは……俺もお前を弟と呼ぶから……　忘れるな……」

「忘れないですよ。僕の最愛の兄貴……！　また明日、ごきげんよう……」

×　　×　　×

それ以来、Tは自ら進んで無報酬の家庭教師になつてく

れた。その指導ぶりは、節度ある厳格なものであつた。
Tが大学へ進んでからも僕は指導を受けた。Tは本当によい最初の兄貴であり、僕に初めて青春の歓びを与えてくれた人であつた。

二、四年目にようやく

銭湯におそく行くと、人が少なくて湯がきれいである。その上、連日多忙な僕などは、夜おそくでないと銭湯へは行けない。ところが或夜、何時もすいているはずの銭湯が、大勢の人で面くらつたことがあつた。銭湯のおばさんの話によると、テレビのある人気番組が終つて、同時に人が銭湯へ押しかけたためであるとのことであつた。
僕は仕方なく、湯ぶねの側の少し空いたところで、体を洗つていた。洗面器に湯を汲もうとした時であつた。今まで隣で洗つていた人が、湯に入ろうとして立上つた。その瞬間、僕は思わず声を立てかけたが、ようやくのことで息をころした。僕の目前近くに見えたのは、途方もなく巨大で、しかもまだ初々しい新鮮な砲身であつた。その人は僕に背を向けて、湯に入つているため、顔はよくわからないが、まだ二〇才までであることは確かであつた。その人が湯から出る時、僕は再び、その巨大な砲身を確かめることが出来た。その人は円い童顔で、立派な体格をしていたから、何かスポーツをやつていることと、独に想像していた。その日から、僕は彼に会える銭湯に行くことが楽しみになつた。しかし度々会つていながら、話し出す機会がないままに、幾週間かが流れ去つた。勿論、チャンスを狙いつつ……

或夜、僕は旅行を前日に控えて、全快しかねていた、風邪の薬を買いに、近くの商店街の薬屋へ行つた。そして彼がその薬屋の店員であることを知つた。
「ここのお店の人だつたの……」
いきなり親しげに話しかけた僕の言葉に、意外に快い返答が戻つてきた。
「そうなんですよ。よくお風呂で会いますね。絵を画いていられるのですか……?」
童顔の彼が笑うと、眼が細くなつて、一層少年らしく感じた。それ以前は、銭湯で会う毎に、口をきく機会がなかつた。しかし僕の発する電波が、既に彼に感じていたらしかつた。所謂テレパシーコンタクトである。旅行から帰つた僕は、みやげものをもつて、彼の店へ行つた。そして入浴後、彼が近くの自宅へ帰つて行く途中まで話しながら送つて行つた。月日と共に親密の度は加わり、

よく彼の帰路に同道して、大きな神社の森で別れるのが習慣となつた。僕達はその神社の森で、長い間、互いに抱きあいながら、相等直接的な話を交わしあつた。しかしそれ以上は、彼の強固な拒否に遮られて、一歩も進展せず、僕の焦燥は日に日に加わり、終に暴力に訴える一歩手前であつた。そして全く突然に、彼は銭湯に姿を見せなくなつた。強い感情をおさえきれなくなつた僕は、三日目に薬局に彼を訪ねた。しかし意外な事実が僕の前に展開した。店主夫人の話によると、彼は店の商品の売掛代金を集金に行つて、先方で値切られたのであつた。そして内気な彼は負けてしまつた。しかし店へ帰つてから、その彼の独壇行為を、店主に報告しかねていた。その結果、店の商品を無断で持出して売却し、その金で、値切られた差額を補塡していたのであつた。ところが日を経るに従つて、その悪循環の金額が増し、彼は自宅にも店にも告げずに、行方不明になつたのであつた。店主夫人の話によると六十万円程とのことであつた。彼の家族も友人も懸命で探したが、すべては無駄であつた。僕は会えなくなつた彼の夢を度々見た。しかし眼がさめてからの空虚なわびしさは耐えられなかつたが、何とも致し方がなかつた。家族の心配を和らげるために、僕は親しい弁護士に相談した。やはり業務横領は免れないとのことであつた。幸い店主も、中学校卒業以来の、彼の実直な本質に免じて、公けの事件には持出さなかつた。

それから約一カ年を経た或夜、僕は初めて彼の自宅を訪ねた。ようやく最近になつて彼が東京より手紙をよこしたとのことであつた。偶然にも僕は、その三日後に、同窓会出席や所用をかねて、上京することになつていた。僕は早速、彼に手紙を書いた。しかし彼からの返事を待つ時間がないため、僕の泊るホテルの電話番号と、到着日時を知らせた。伊丹を飛立つてから機中で果して彼が僕に連絡するだろうか……？　或は会いたくないのではなかろうか……？　と、種々憶測した。事情が事情だけに、僕は至極不安であつた。そのためホテルに到着しても、少しも落着かなかつた。だが、すべては僕の思いすごしで、僕の手紙に書いた時刻に、全く正確な時刻に、電話のベルが鳴つた。彼は一刻も早く僕にあいたい……とのことであつた。彼は四〇分後に、ホテルのフロントへきた。彼は僕に全てを話した。彼の持出商品の代金は最高に見積つても四十万円を絶対にこえないと、店主夫人の僕に示した金額と二十万円の差があつた。しかし僕は、以前のままの彼であることと、その時、彼が既に健

全な再出発をして、懸命に努力中であることを知つて、何より大喜びし、安堵したのであつた。話し終つた彼は精神的な荷の一部を降ろしたためか、僕の部屋に泊りたいと希望した。僕が拒否するはずはない。二人で久しぶりに入浴した。二〇才の彼の体のすべては、すつかり成熟し、浅黒く盛上つた胸には体毛が黒々と密生してたくましく、いきなり僕を悩ませたのであつた。起伏した肉付きのよくなつた彼の両腕を握りながら、僕は唇を差出した。彼はも早、あの神社の森での彼ではなかつた。うれしそうに微笑みながら、彼は唇を出してくれた。浴室で全身限なく愛しあつた二人は急いでタオルで拭い、そのままベッドへもぐりこんだ。彼のすべては初めて僕の自由に委ねられた。四年越しであつた。それだけに僕の感激は格別だつた。彼はその時まで、誰にも体に触れさせたことがなかつた。巨砲は……長い間、夢見ていたあの巨砲は、荒々しく脈うつて、不落の強固さを誇るかのごとく、僕に挑戦してきたのだつた。密林は両脚につながつて黒々と展開し、巨砲の先は露がにじみ出て、正確な間隔をおいて、力強く脈うつていた。僕は感極まつて、巨砲の正面下部より、そびえる巨大な砲先を仰ぎ見た。ああ何たる偉大な英姿であつたか……………!!

僕は全く表現方法のない感激であつた。彼の難攻不落だつた強固な超巨砲も、僕のあらゆる攻撃には、終に屈服する時がきた。

ブラボー……　ブラボー……　僕の一挙一動に彼は声をあげ出した。そしてその声が次第に高まり、もはや声でなくうめき声となつて低く力強くひびいた瞬間、彼の偉大なる巨砲より発した青春の泉は、高く、また四方に、惜しげもなく飛散したのであつた。全くすさまじかつた。僕の顔や肩も、彼の聖なる白濁の水で清められた。僕はうれしかつた。本当にうれしかつた。そして再び彼の巨砲の仰ぎみた。戦い終つても尚、彼の巨砲の威力は何等衰えることなく、依然と天空向つてそびえ、再び僕に激しい戦斗を挑むのであつた。幾度となく繰返えされた戦斗は、綿密な作戦計画で、共に華々しく歓喜のうちに終つた。

×　　×　　×

東京の街に朝がきた。彼と僕は、昨夜とは全く隔絶された世界で、力強い活動に移つていつた。

僕は大阪に帰つて、彼の自宅を訪ねた。そして彼の健全な現在と事件の詳細を、家族に残りなく話した。その夜家族の中に、初めてあつた高校二年の弟が可愛いかつた。

その弟は、僕の誘つた週末旅行に、早速付合つてくれた。そして彼の兄よりも、更に巨大な若い巨砲に、僕の方がすつかり狼狽させられてしまつた。美しい露を含んだ未開の花の固さは、そのまま新鮮な果物に均しかつた。それ以来、その高校生は、社会人となつた今日でも、僕の旅行によく付いて出かけてくるのである。今はもう、すつかり咲ききつた彼の青春は、更に立派に成育し、僕のよき友となつている。彼の兄も東京で結婚し、生活も落着いた今日であるが、やはり僕の上京時に、ホテルに訪ねてくることを、楽しみに待つていてくれるのである。

三、南の夜想曲

一定の間隔をおいて、夜空に美しい火を噴き上げている桜島を見下ろせる。山の温泉の夜も次第に更けていつた。僕は就寝前に浴室に行つた。さすが賑やかだつたホテルも鎮まりかえつて、廊下を歩く僕の足音だけが聞えるのみであつた。特に僕の部屋のある別館の浴室は、余り人がこなかつた。脱衣して浴室に入ると、半ば暗くなつた中に、誰かがいい気持で寝ているようであつた。最初は気にもかけなかつたが、僕が湯から出る時も、その人は寝たままだつた。五月の快い季節とはいうものの、もし風邪でもひきそえると、折角の旅行が不快になること思つて、傍へ寄つて起こしかけた。その人はまだ二〇才位の体格のよい青年で、酒に酔つてはいなかつた。無雑作なスタイルで寝ているため、全身がことごとく露出している。僕は静かに肩をゆすつた。五度か六度ゆすつても、その人は起きなかつた。薄明りに見るその肌黒い青年のたくましいシンボルが、僕の眼から離れない。その上、豊かで無雑作な長髪と、むせかえるような強い体臭が、僕をすつかりとりこにしてしまつた。僕のとても好きな条件が具わつていたからであつた。僕は思いきつて、その青年に寄添つて寝ころび、大腿部をやわらかくもんで起した。そして起きたのは青年自身でなく、彼の子息であつた。僕はハツ……！とした。その青年の力強い砲身に、僕自身も同じ形態をとつて、はずむ呼吸をおさえることが出来なかつた。これ以上、どうしようか……？と僕は迷つた。その瞬間、青年は僕に抱きついてきた。何だ……!! たぬき寝だつたのか……僕は安心して青年を抱きしめた。日やけした若い童顔が僕の肩の上でほほえんでいた。誰もいない薄明りの浴室二人は思う存分に愛しあい、次第次第に最高潮に上つていつた。その時である。僕等二人は突然に抱きつかれた

のであつた。余りの突然に驚いている二人に、
「僕だけを一人にしないで下さいよ。いいでしよう…！」
とほほえみかけてきた。顔をよく見ると、それはそのホテルのボーイであつた。年令の接近している三人の愛の表現は、あれこれと激しく甘く展開した。最後に三人は三つ巴の型になり、夫々相手の葉巻煙草を喫い乍ら、次から次へと絶叫しつつ、青春の生命を、相手の体内深く浸透させていつた。

　さわやかな朝がきた。みやまきりしまがとても美しくホテルを包んでいた。ロビーで再会した昨夜の青年は船員で、鹿児島港にていはく中、温泉にきたのだつた。またボーイは三カ月後の夏季閑散期を利用して関西旅行にきた。そして僕を訪問してくれ、二人だけで、再び鹿児島の温泉のあの夜を、楽しく力強く再開したのであつた。

四、教えられた六尺

　あわてて飛びのつたバスが方向違いで、しかもそのバスですつかり居眠つたから、僕は全くだらしない。気がついて下車した時は、とんでもない停留場だつた。電車まで約二キロはあるが、快い夏の宵だから、田んぼ道を一人気楽に歩くことにした。処々に人家があるのみで行き交う人など全くない。後から来たヘッドライトを右側にさけていると、その車が思いがけなくも僕の横にとまり、中から声がした。
「どこまで行かれるの……？」
「○○駅です」
「歩いては大変だ。乗つたら……？」
僕は有難いと思つた。
「すみません。よろしくお願いします」

× × ×

　その人は車から降りて、暗やみの田んぼ道をよいことに放尿しかけた。俗にいう連れ小便である。僕も横にならんで同じく……。
僕がそつと彼のプロフィルを見ると、その人は四〇才に程近い商人風であつた。
「兄ちゃんの立派やね」
「反対でしよう。兄さんの方が大きそう」
と互に冗談を交わしたのを好機に、僕は半分ふざけて、半分期待しながら、左手でその人の腰を抱いた。相手の体がぐつと押してきた。もう安心である。夏で薄着の二人は、肌を接しあつた。車は丁度その付近に工事中の道路へ転進した。未開通道路だから、絶対通行の筈がない

と彼はいつた。何の障害もない夏の夜の田んぼの一本の工事中の道路、遠くの国道を走るトラックの音が、かすかに聞えてライトが走つてゆくばかりである。僕はシートに横たわつて、その人のものを片手でまさぐりつつ、その人のなすがままに、僕の体を委せた。次第に度を加えてくるすごい攻め方、そのテクニックは抜群であつた。僕はたまりかねて幾度絶叫したであろう。その人は自らズボンを脱ぎ、僕のブリーフも脱がせてしまつた。浅黒い中肉中背でよく引締つた体にまとう六尺褌が、暗闇の中に一層白く目立つて、僕の理想的な粋なスタイルに、思わず前袋に顔を押しあてた。褌にしみこんだ聖なる白濁の泉の甘い香りが、たまらなく僕を興奮のクライマックスに追込んだ。

電車の停留場へ送られて車から降りた時は、身心共にさわやかだつた。次にあつた時、その人は、前に渡してくれた褌と交換に、新しいのをくれた。そして六尺褌の効果と締め方を教えてくれた。いかにも日本の男子らしく身が締るので、今までも度々締めている。それ以来、僕は六尺褌にすつかり魅せられてしまつた。学生ファンの僕が、後日、或大学生と抱合つた時、期せずして彼の褌の結び目に、僕の手が触れた時のうれしさは、今も忘れることができない。

五、清純のセレナータ

四四年一一月の中旬の夜、すみきつた晩秋の夜空に、住友生命の淡いやわらかなネオンがとても美しかつた。ターミナルのプラタナスも、ようやく枝を離れて、歩道に秋の模様を描き出していた。

「急がれますか……？」

「いいえ、大して……！」

「では喫茶店で話しましようか……！」

事務所を共に出た青年に呼びかけられた僕は……いや!! 僕の方から話し出そうとしていた瞬間、青年が僕の先手をうつたのだつた。僕は初めてあつた青年に、不思議にも何の警戒も限界の必要も感じなく、思つているままを話した。南国出身のその青年は、蒼白いとも思われる顔色で、やや神経質とさえ思わされる眼をして、しかも短髪だつた。僕が平素抱いているイメージとは、全く正反対の青年を前にして、僕は刻一刻とその青年に魅せられていくのであつた。それは、青年の北国風とさえ思わされる風采と反対に話しあつているうちに、いかにも南の人らしい大らかな力強さと、しかも秩序正しい話しぶり

に、強く魅せられたのであつた。特に青年が親に対する実直さと、自己の謙譲さ、そして僕が青年を讃えた言葉に対して、はずかしそうに視線をそらせてうつむきながら、うれしげにほほえんだその純情さに人間の美しさを見出して、とても喜んだのだつた。その青年には、都会的な功利さと技術的な話術が全くなく、正真正銘な美しさと力強さに充ちていて、本当に好感がもてたのだつた。
喫茶店を出た僕は、その青年と別れるのがわびしくて仕方なかつた。青年は僕の内心を察知してくれたようであつた。

× × ×

浴室から出てきた青年の胸は大きく、その引締まつた全体は、先の印象とは余程異つて、僕のイメージに近いものであつた。ベッドへ互いに横たわり、二人がしつかり抱きあつた時、青年は二度も身ぶるいした。腰部から大腿部への線の美しさは、青年期独特の、力強く弾力に富む起伏ですばらしかつた。武装を整えたたくましい青年の男性自身もみごとで、僕の動きに応えるかのように、青年のもらす声は循環的に、互が高潮するための動力であつた。彼の声によつて激しさを増す僕の行動、その行動によつて青年の声は次第に高まつて終に絶叫と化した。力強い低いうめき声と共に、青年の全身はぐんと伸び、両腕は僕を激しく抱きよせた。僕のある部分に、熱い熱い液体が流れたのを快く夢心地のうちに味わつていた。静かな美しい楽しいひととき、彼の唇と僕の唇は、互いに力を失いつつも離れることなく、最後迄重なりあつていた。

× × ×

服装を整えた青年は、再び先の端正な青年に還つた。感情と行動を完全に切換えることができる清潔な青年に僕は一層好感を抱いた。青年と僕は、すつかりうれしくなつて、一週間後の再会を約して別れた。しかし約束の日に、青年は見えなかつた。恐らく急用でも発生したのであろう。あの夜、僕の着ていた上衣を、しきりと讃美していた青年に、僕は上衣を脱いで、青年に渡さなかつたことを、淋しい思い出として忘れ難い。

六、ラ・ロンド（回旋曲）

その前夜で仕事を終えた僕は、朝ぐつすり寝込んで、昼過ぎにようやく眼がさめた。博多の五月はもう暑かつた。東京に出発するまで丸一日もあつたため、僕は見物と買物をかねて街に出た。大濠公園の一角が気に入つた

ため、持合せの鉛筆で官製はがきにスケッチして知人に送つた。夕方ホテルへ帰るべく道を歩いていて、ある風変りな建築工事現場の前にきた。その時、全く偶然に工事現場より出てきた、ヘルメットに作業服の現場監督を見た僕は、自分の眼を疑つて思わず立止まつてしまつた。先方も驚嘆の様子で僕を凝視していた。短かい幾秒かの静かな緊張が急にとけて、監督と僕は手をとりあい、互の無事と奇跡の会合を喜びあつた。

「Fじやないか……!! 珍らしい…」

「Tさん……! 驚いた。まさか博多で偶然に会えるとは思わなかつたですよ」

× × ×

忘れることのできない高校一年の時、僕に青春の歓びを初めてくれたT。そして家庭経師として厳格なコーチをしてくれたT。僕が永遠に忘れられないあのすばらしく高い鼻と大きな瞳が、ヘルメットの下に輝やいていた。日の長い夏の工事現場、しかも総監督のTは、作業終了後も、何かと多忙のようであつた。しかしホテルへ夜は必ず訪ねて行くからと約束してくれたから、夕食を共にとることにして、僕はホテルへ引揚げた。

その夜、夕食の席上で、久しぶりになつかしい高校時代の話に華が咲いた。Tは三〇才を出てから不幸な結婚をし、その時は再び独身であつた。土木技師と一級建築士の資格を併せてもつているTは、大きな建設会社の主要ポストにいて、その時は博多のレストラン工事の総責任者であつた。何でも建築施主が大変な凝り性で、ムーアスタイルの建築を希望し、アラビア更紗のモザイコや、パセオと呼ぶ中庭に、グラナダのアルハンブラ宮殿まがいの獅子噴水も必要だとのことであつた。

それから話はアントニオ・ガウディの建築技巧に発展し、僕は理性の勝つた数学的な建築をする、日本の有名な某建築家は、大嫌いであると勝手なことをいつてしまつた。職業柄にも似ず、アルコールを一切口にしないTは、

「Fは高校生の頃から、理くつぽい冷たいものが嫌いだつたナ……。今も全く同じだね。だから俺とはよく気があうんだ」

といつて笑つた。

ホテルの部屋は冷房が軽く効いていたが、僕はのどや声に悪いから、最少限にしたいといつた。Tも明日の体力のため、冷房は害があるといつたから、スイッチを切つて窓を少し開けて寝ることにした。ホテルの五階の窓から見る博多の夏の夜は、Tと共にいたためか、とても

情緒深かつた。シャンデリアをスタンドに切りかえて服をぬいだ。久しぶりに僕の目前にあらわれたTの立派な体格は、既に四〇才近い男盛りで、学生時代より爛熟した魅力があふれていて、僕に新しい輝やきを投げていた。未完の美の新鮮さはすばらしい。しかし完成した個性美には複数の美があつて、一層立派だとつくづくTの体に眺め入つていた。起伏の変化のある赤銅色の堂々たる体くは、相変らず豊かな体毛が随所に密生していた。特に六尺褌を想像させられる簡易なミニブリーフはすばらしく、はみ出している黒色の豊かさは、も早理性の存在など、徹底的に否定する程の迫力で、僕を圧倒していた。

「Tさんのブリーフ、珍らしい型ね。博多にあつたの……？」

「いや東京だよ。洗たくしてなくて汚れているがよかつたらはいてくれよ」

「Tさんの体につけていたんだもの、僕ほしいよ…！」

× × ×

彼は相変らず無雑作にブリーフをぬいで、渡してくれた。久しぶりの二人だけの世界である。ベッドで抱きあいながらTはいつた。

「俺のことなど、よく覚えていてくれたね。とつくの昔に忘れられていると思つていたんだよ。」

「とんでもない。Tさんのことを僕が忘れるのは、人生最後の日ですよ。折にふれては思い出しているんです。忘れよという方が無理ですよ」

× × ×

Tの愛撫を久しぶりにうけて、僕は恍惚となつていた。Tの巨砲は僕の記憶より更に立派であつた。黒く固い幽金のような砲身、そして熟れて美味しそうな砲頭、いづれも僕にはなつかしく、いつしか僕はTの森に顔を埋めて感がい無量だつた。その時、思いがけなくもテーブルの電話のベルが鳴つた。Tに連絡の人がきたという。僕はびつくりしたが、既に聞いていた突貫工事のことを思い出して、別に不思議には思わなかつた。僕はひとりうつらうつらしながらTを待つていた。

ロビーに降りていつたTは、やがて二十七、八才の青年を伴つて部屋に帰つてきた。僕があわてて服装を整えようとすると、僕を制し、T自らも裸になりつつ、青年を僕に紹介した。青年はTと同じ工事現場の技師であつた。任侠風のその青年を、帰らせてしまうのが、僕は惜しいと思つた。時刻も既に遅いことを口実に、共に寝ることをすすめると、Tも僕に話を合わせていつた。

「N、よいだろう。明日の朝、俺といつしよに現場へ行こう」

Nは T にいわれるままに服をぬいだ。それを見ていて僕はびつくりした。Tとは対照に、色白の肉付きのよい美しい肌に、左の肩から腕にかけて、獅子とぼたんのいれずみが鮮やかであつた。Tと僕の間に入つたN。僕は天から降つてきたようなNにとまどつて、少し固くなつていた。

「おいF……！　俺と同じようにNにしたつていいんだよ」

×　　×　　×

Tの言葉に笑つていたNはやがて立上つた。大きく呼吸するように荒々しくはねているNのシンボルは上向いてすごく活発だつた。一糸まとわぬ三人の男性が、深夜のホテルで心ゆくばかり展開した愛の饗宴の、華麗にして最上の楽しみだつたことは、今も僕の脳裡に判然と印している。

×　　×　　×

明くる日の午後、板付のタラップを上りきつた僕は振りかえつた。送迎用デッキに手を振つていてくれたTとNに、僕も手を振つて機中の人となつた。

×　　×　　×

ラ・ロンドとは、音楽の形式で、最初の主題が次々と別な音楽を呼び入れて発展し、最後に最初の音楽へ戻るのである。僕はTによつて青春の歓びを教えられた。そして次から次へと展開した歓びは、はからずも博多でTと再会して、最初の主題を繰返した。音楽ならこれで一曲終りである。しかも博多のロンドは、Nの出現によつて僕は新しい最初の経験をした。博多の一夜は、ロンドの終りでもあり、また初めともなつた。次々にいかに発展展開するであろうか……!!

拙文を最後までお読み下さつた方々に、厚くお礼申しあげます。そして拙文中の人々に似た方や、僕の多彩な希望のうちの何か一つにあつた方で、文通や交際をして頂ける方がありましたら、是非よろしくお願い致します。ご連絡下さる日を楽しみに待つております。

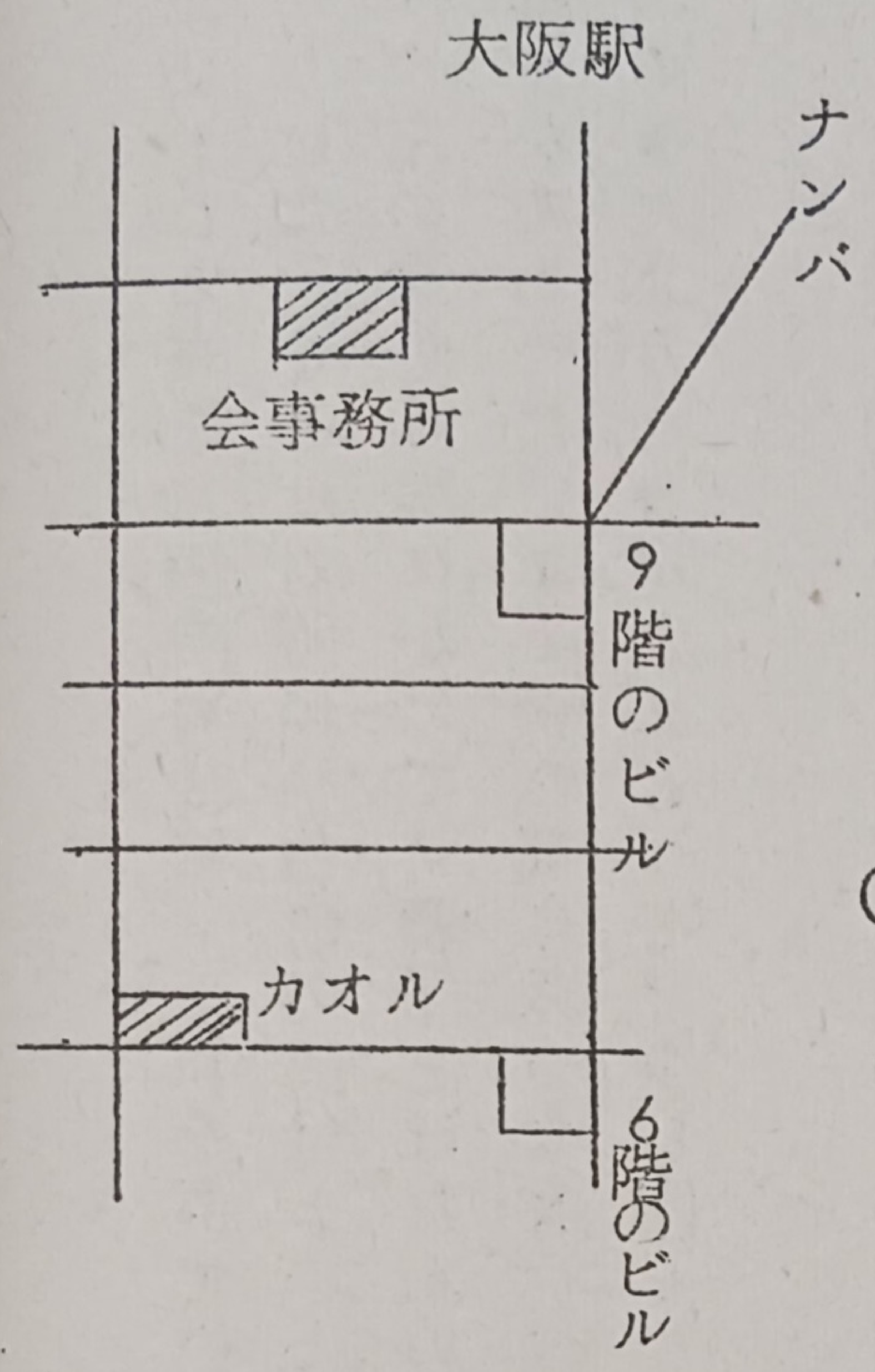
☆！☆！☆！☆！☆！☆！☆！☆！☆！☆！☆！☆！☆
安心して遊べる会員の店

会事務所の近くですから
お気軽にお越しを
お待ちしております

スナック
カオル

大阪市浪速区元町五丁目五四二
弥生ビル一階
TEL 06（641）6594番

〒番号556



会の休日と開放時間

休日は　毎週火曜日と第二、四日曜日

開放日は

月、水、木、金曜日は
午後二時より八時迄

土、日曜日は午後二時より十時迄

架電の場合は右の時間中にして下さい。

尚、電話では会の内容についての説明は致しませんから御了承願います。

電話番号は
06　641　7098番

会員便り

お送り頂いた「十周年特集号」会誌を拝見し如何にも誠実な毛利様の御人格が行間から読みとられ、これこそ永年求めていた会との感を深くしています。　以下略

富山県　二、七八六番　十一月三日付

清心が到着すると先づ毛利様の文を始めから終りまですべておとさず読んで私の心のかてとしております。

以下略

東京都　二、五四五番　十二月五日付

寒さ厳しい折柄先生には如何にお過ごしでしようか。この度は二回目の会誌を御送付頂きまして誠にありがとうございました。僕は先生の持論に心から感銘しております。機会に恵まれない地方在住者にとつて清心は先生はこころの支えとなつております。これからもよろしくお導きのほどお願い申上げます。　以下略

新潟県　二、七七一番　十二月五日付

その後如何お暮しでしようか。折にふれ先生の暖かいふんい気を思い出しなつかしがつております。清心　今日たしかに拝受いたしました。冊子のすみずみまで編集のご苦心と親心にも似たいつくしみがあふれているのを感じ、心から感謝申上げることでございます。特に先生のお書きになつた頁を拝見し、今迄の私にも至らぬことがあつたのではなかろうかと反省したりこれから先の自分のとるべき姿を教えてもらうことでした。いたずらに自分の主張を通そうとするのが私共の通念…いろいろな面で教示下さいましてほんとうにありがとうございました。　中略　お寒くなります。ご自愛下さいましていつまでも私共のよき指導者としてご教示下さる様にお祈りします。　以下略

鹿児島県　二、七五九番　十二月五日付

先生の意見一つ一つが身にしみます。そして私自身の生きる心のかてとなります。　以下略

静岡県　二、五四一番　十二月六日付

本日お便りと名簿並に会誌を受取りました。ありがとう存じます。早速名簿を見ましたら私の番号が出ており

また会誌の裏にも番号が書かれてましたのでこれでやっと貴会の一員になれたものと安心いたしました。　中略
会員の一人一人のために種々と御世話下さる会長さんには大変なことと思いますが、頭の下がる想いでいっぱいです。深く感動を覚えます。　以下略

北海道　二、七七〇番　十二月六日付

先日は突然お訪ねして申訳けございません。先生にお会いし何故もつと早くお訪ねしなかつたかで今更乍ら悔んでおります。先生が御立派な為か丁度居合せたK君と食事に行き話を聞きました処、言葉のはしばしに先生に対する信頼感がひしひしと感じさせられ、大変に感動いたしました。　以下略

東京都　二、七八五番　十二月七日付

先ごろ会誌をお送り下さつて早速楽しく読ませていただきました。会誌全体の中から我々会員の為にいろいろ心をくだきご指導下さる事を感謝致します。私もよき会員として会の発展のためにお互いの幸せの為に心掛けたいと思います。　以下略

長野県　二、七四二番　十二月八日付

前略　良き会に入らせて戴きましたこと心より嬉しく感謝しつつ貴会の何時何時までも続いて行けるよう祈りつつ筆を止めます。

大阪府　二、七六七番　十二月九日付

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

中年好みの青少年にやさしい父として先輩としてつきあいたい。また性に関するいろいろな質問と先輩として親切にお答えしたい。どんどんお便り下さい。

香川県　二、六九八番

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

☆　☆　☆　☆

入会して日は浅いがほんとうに良い会にはいつたと思つております。商売屋に勤めておりますが午後八時以降は一人で店の留守番をしておりますので会員の親しい仲間が時々泊りがけで遊びにきております。こんな親しみある交際のできるのはお互いに会員であればこそだと思います。同年以下の人を求めます。
中肉中背二十五才で会社員です。来訪結構。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大阪府下　二、五四二番

☆　☆　☆　☆　☆

会員としてはもう古顔です。ほんとうに入会してよかつたと何時でも思つています。これだけ安心できる会はどこにもありません。好みは二〇才より二十五才位いの弟のような人です。中肉中背で四十四才会社員。

兵庫県　三、〇一七番

☆　☆　☆　☆　☆

父親のムードを求めたい人は事務局経由でお便り下さい。返事は必ず出します。果してご希望の相手になれるかどうかわかりませんが、誰方でもお便りをお待ち致します。　六十一才　一、六三米　五三キロ　温和　会社役員

大阪市　三、〇一六番

☆　☆　☆　☆　☆

若い友達を求む。年令二十三才位いまでの方友達になつて下さい。希望としてはメガネなし、毛深くない人で、小柄で健康な人、そしてしばしば会つてくれる人。僕は身長一、六二米　五四キロ　電工です。

大阪市　二、六四八番

☆　☆　☆　☆　☆

在籍七年の会員です。本会の事は私が一番よく知つていると思います。年下の弟か、兄の様な人を求めます。岡山の生れですがずつと大阪に住んでいます。中肉中背　会社員　二十六才　文通で会の事を知りたい人もお便り下さい。

大阪市　三、〇一二番

☆　☆　☆　☆　☆

父親のムードの欲しい青少年を求めます。特に音楽（クラシック）に興味をもつております。一度会つてみませんか。中背やや肥満　会社役員　五二才

大阪府　三、〇〇二番

☆　☆　☆　☆　☆

ずいぶん昔のこと。中学生の頃、上級生に何となくあこがれを抱いたり、又自分が上級生になつた時に下級生に慕われた事などを夢よりも深い思い出としていつまでも忘れ得ないで、もう中年になつてしまつた男です。誠実な人からのお便りを待ちます。

大阪府　二、五七〇番

☆　☆　☆　☆　☆

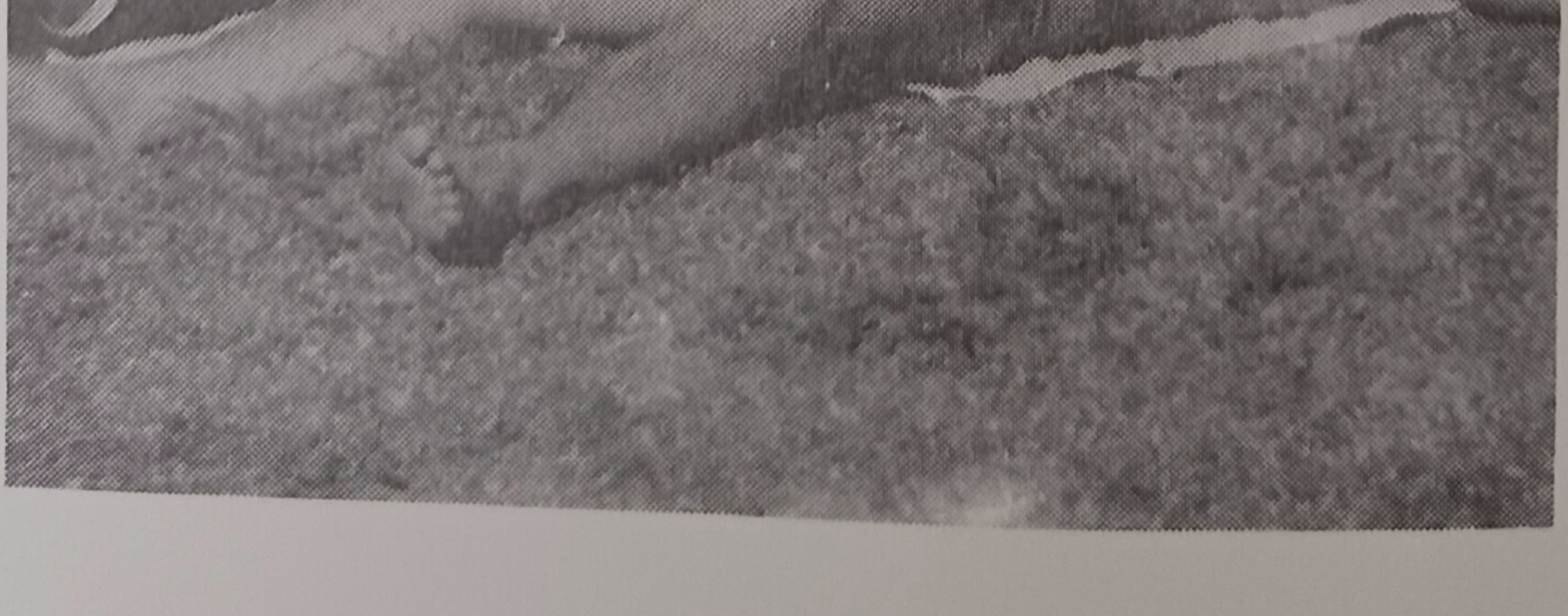
入会して日も浅く一度上阪して良き友を得たいと思うものの仕事に追われてその機会もなく田舎で一人淋しくしています。誰か話しかけて下さいませんか。温厚誠実な小柄な人。ヤセ型の人。焼物の好きな人であれば遠近も年令も肌色も問いません。返事は必ずします。当方二十七才　一、七八米　六三キロ　会社員

岡山県　二、六九二番

☆　☆　☆　☆　☆

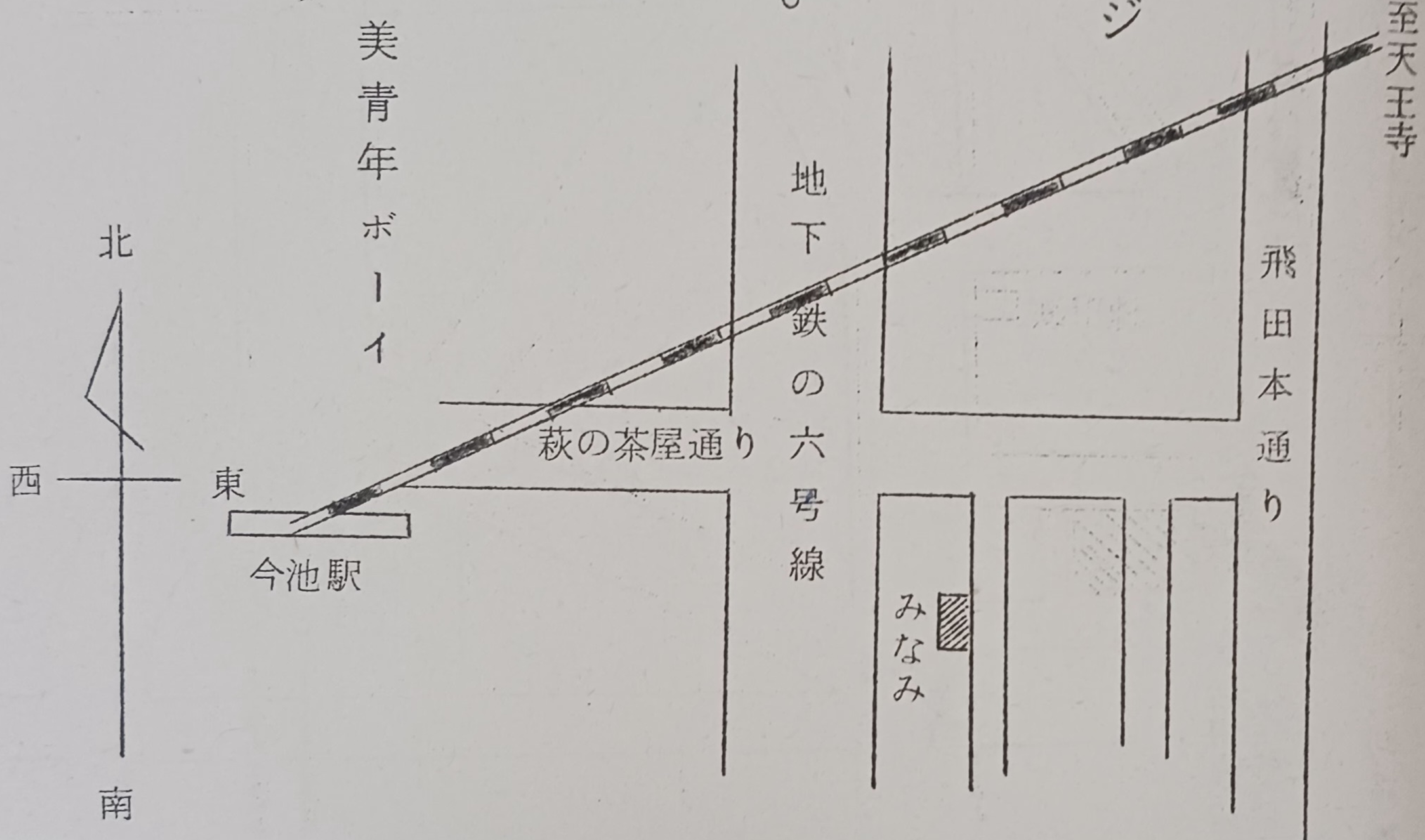
当方四十三才で小柄で小肥りの音楽教師。近県、東京、大阪、名古屋在住の二十二才以下の大学生が二十七才頃までの定職のある青年で長身、筋肉質、面長な顔の持主で清潔誠実な方と心身共に愛しあいたいと思います。趣味は「古典音楽」「観劇」小生の好みのタイプの青年とこれらも一緒に楽しめたら最高だと思つています。写真同封でお便り下さい。当方も必ず写真お送りします。

富山県、二、七六八番



お食事から
マッサージ
お宿まで
お引受け
致します。

求む　美青年ボーイ



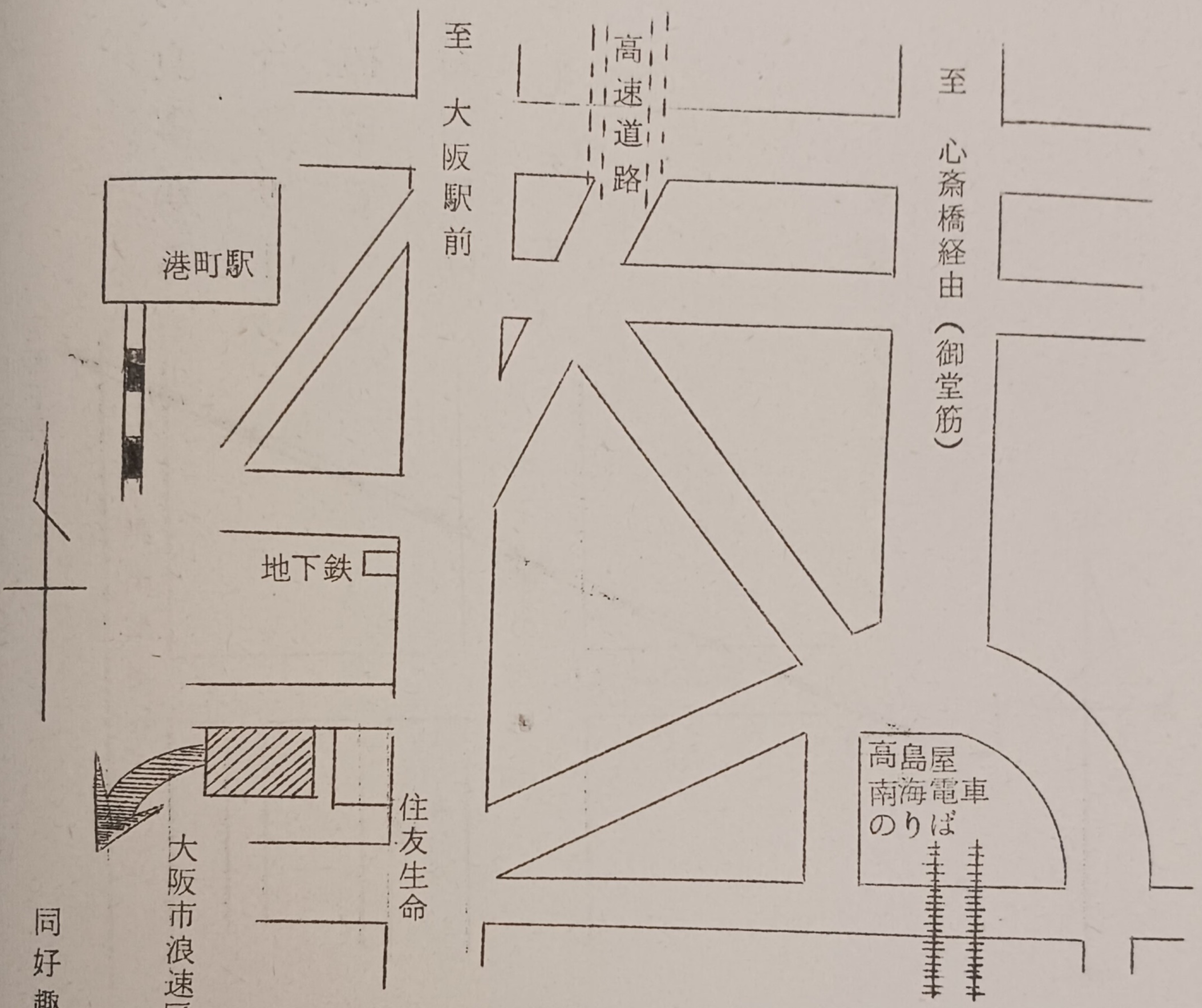
大阪市西成区今池町四拾壱番地

喫茶・お茶漬の店

みなみ

TEL (631)6632

会事務所見取図



今般地下鉄３号線が開通しましたので、当会事務所に来られるのが大変便利になりました。大阪駅西口より、玉出駅まで開通しておりますので、その中間の「なんば元町駅」で下車されて、南出口へ出て南へ１５０米位来ますと住友生命南支社があります。その横を右へ（西へ）約３０米2軒目でブリキヤの二階ですから大変判りやすくなりましたから精々利用して下さい。

大阪市浪速区元町二丁目 電(06)(641)七〇九八番
郵便番号 556
同好趣味の会事務所（ブリキヤ二階）

会　員 番　号		残 高	
会費 12 月末現在		不足額	